



Kyushu Sangyo University
九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University



令和2(2020)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2021年3月30日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社



博物館が、人を育てる。

museum

令和2年度 文化庁
「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書



「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、
田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

本事業のねらい・趣旨

団塊世代が75才以上となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれる。そこで本事業は、博物館において高齢者の居場所と出番を創出していくために、これらを実現可能にする人材を育成し、全国に約5,700館ある博物館が地域包括ケアシステムの新たな拠点「博物館健康ステーション」を担っていくことを目指す。

具体的には「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」をいち早く進めている英国・米国に着目し、社会保障費の削減

や癒しの場、さらに処方箋に書ける“博物館像”を見出そうとする国家プロジェクトを調査する。それを基に、①博物館関係者を対象とした展示制作、照明、梱包などの技術研修会、②芸術療法・音楽療法・園芸療法・アニマルセラピー・回想法等を取り入れた研修会などを実施する。

また、九州産業大学を中心に地域博物館、医療・福祉機関との連携による新たな博物館マネジメント方策についても、心理学的な質問紙の利用だけでなく、客観的な生化学的・生理学的な方法によるストレス反応測定によって博物館教育プログラムの科学的な評価法を開発し、国際シンポジウムの中で提案していきたい。

本事業の実施概要

1. 博物館マネジメント人材育成研修会の実施(展示制作、展示グラフィック、資料保存等の技術研修=ミュージアム/テクニカルコースとともに、「記憶」に残る博物館資料を活用した芸術療法、音楽療法、園芸療法等の介護予防プログラム研修=ミュージアム/セラピーコースを実施する)
2. 博物館健康ステーションの開設(地域の高齢者を対象に、研修会修了生が企画立案するミュージアムカフェを開催し、高齢者の博物館における居場所づくりを進める)
3. 多言語学習教材の開発(高齢者に馴染み深い博物館資料の守り方、見せ方を学ぶための学習教材を作成することで、現職学芸員・休職学芸員の研修での活用、さらに2020東京オリンピック・パラリンピックの訪日外国人に向けた日本文化や博物館バックヤード紹介教材として活用する)

注:2020東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため延期。

4. 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める英国・米国の博物館との交流事業(米国・英国の博物館で実施される後期高齢者、認知症高齢者に対する先進事例の継続調査。特に生化学的・生理学的な方法による効果評価測定法の聞き取りから、今後の博物館マネジメント方策を研究する)

5. 英国・米国・日本の博物館関係者によるオンライン国際シンポジウムの実施

6. 3ヶ年の事業を紹介する映像資料の制作(本事業で得られた調査研究の成果をコンパクトで紹介する映像資料を制作する)

7. 博物館マネジメント人材育成事業実行委員会の開催(実行委員会に次の3部会を設ける。①調査研究部会、②プログラム開発・評価検討部会、③教材開発部会)

本事業による人材育成の目標

博物館が高齢者の居場所と出番を創出していくためには、現職学芸員や学芸員有資格者(休職学芸員)及び博物館関係者が、これまで以上に保存管理、展示教育等のスキルをアップしていくことはもちろんのこと、特に「記憶」に残る博物館資料を活用した各種療法を学ぶことが重要になってくる。

このため本事業では、美術館で芸術療法、歴史民俗博物館で回想法、動物園や水族館でアニマルセラピー、植物園で園芸療法などを学ぶ機会を提供し、それぞれの博物館で

介護予防や生活支援等の新たな博物館の価値を創造し得るマネジメント人材の育成を行う。

また、現在博物館に従事していない学芸員(いわゆる休職学芸員)についても育成対象とし、博物館が地域課題を解決する場として社会的な役割を獲得するために、広く啓発を図りたい。さらに、コロナ禍、コロナ後の博物館活動に対する新たな価値創造に向け、これまで以上に洗練されたマネジメント人材の育成に努めたい。

本事業の社会的な役割、効果

博物館は地域の文化財を保存管理、調査研究し、展示公開する場所であり、地域の「記憶」を集積する場でもある。しかし、近年の社会教育調査では「国民の博物館利用は年1回程度」というデータがある。

従って、今回実施する事業により、文化庁「文化芸術推進基本計画」(平成30年3月)が示す「博物館が地域課題を解

決する場」として社会的な役割を獲得し、「医療・福祉のよりよい関係づくり」を推進することで、地域包括ケアシステムの内、予防や生活支援で博物館の活用の幅を広げる科学的な根拠に基づく効果=新たな博物館医療福祉マネジメントの提案が期待できる。

組織体制

実行委員会名簿

- 委員長 緒方 泉 (九州産業大学地域共創学部・教授)
副委員長 三島美佐子 (九州大学総合研究博物館・准教授)
委員 朝鳥 和美 (田川市石炭・歴史博物館・学芸員)
委員 市川 靖子 (直方谷尾美術館・学芸員)
委員 鬼本佳代子 (福岡市美術館・主任学芸員)
委員 松村 利規 (福岡市博物館・学芸課長)
委員 塚田 仁次 (海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部海洋動物課係長)

事務局名簿

- 事務局長 中込 潤 (九州産業大学美術館・学芸室長)
事務局次長 永井 浩一 (九州産業大学産学連携支援室・課長)
事務局員 林田 純一 (九州産業大学産学連携支援室・室員)
事務局員 吉田 公子 (九州産業大学美術館・准教授)
事務局員 三戸 丈治 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 門井 慶介 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 四ヶ所 悦子 (九州産業大学産学連携支援室・室員)

学芸員技術研修会スケジュール

| 番号 | 研修内容・開催日 | 開催場所 | 講師 |
|----|---------------------------------|------------------|---|
| ① | 梱包技術 2020年8月17日(月) | くまもと文学・歴史館 | ヤマトグローバル ロジスティクスジャパン(株) 九州美術品店社社員 |
| ② | 展示グラフィック 2020年8月28日(金) | 宮崎県総合博物館 | 熊谷 淳一 (株式会社ノイエ) |
| ③ | 博物館リニューアルと照明計画 2020年9月1日(火) | 武雄市図書館・ 歴史資料館 | 藤原 工 (株式会社灯工舎) |
| ④ | ユニバーサル・ミュージアムⅠ 2020年9月4日(金) | 九州産業大学 | 広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館) |
| ⑤ | 資料保存 2020年9月8日(火) | 新中津市学校 | 木川 りか (九州国立博物館) |
| ⑥ | 著作権 2020年9月11日(金) | 琉球大学 | 福井 健策 (弁護士、日本大学芸術学部) |
| ⑦ | ユニバーサル・ミュージアムⅡ 2020年9月15日(火) | 鹿児島国際大学 | 佐々木 秀彦 (〈公財〉東京都歴史文化財団)他 |
| ⑧ | 展示制作 2020年9月23日(水) | 諫早市美術・歴史館 | 洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館) |

令和2(2020)年度学芸員技術研修会日程一覧表

Contents

| | |
|--|----|
| 1 本事業のねらい・趣旨 | 01 |
| 2 本事業の実施概要 | 01 |
| 3 本事業による人材育成の目標 | 01 |
| 4 本事業の社会的な役割・効果 | 02 |
| 5 組織体制・学芸員技術研修会スケジュール | 02 |
| 6 博物館マネジメント人材育成研修事業 | 03 |
| ① 梱包技術 | 05 |
| ② 展示グラフィック | 07 |
| ③ 博物館リニューアルと照明計画 | 09 |
| ④ ユニバーサル・ミュージアムⅠ | 11 |
| ⑤ 資料保存 | 13 |
| ⑥ 著作権 | 15 |
| ⑦ ユニバーサル・ミュージアムⅡ | 17 |
| ⑧ 展示制作 | 19 |
| 7 連続講座 | |
| ① 庭園・美術館de園芸療法 | 21 |
| ② 動物園deアニマル・セラピー | 22 |
| ③ 歴史資料館de回想法 | 23 |
| ④ 美術館de音楽療法 | 24 |
| 8 ミュージアム・カフェ事業 | 25 |
| 9 多言語学習教材開発事業 | 26 |
| 10 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める米国・英国博物館との交流事業 | 26 |
| ※新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため、現地調査中止 | |
| 11 米国・英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業(オンライン方式) | 27 |

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム・テクニカルコース)

「学芸員技術研修会」という名称で開催

学芸員技術研修会



人間は、これまで「動くこと」「集まること」を繰り返しながら、社会、そして文化を形成してきました。

しかし今、それが大きく制限されています。

そして、私たちには、感染拡大防止の3つの基本である「身体的距離の確保」「マスクの着用」「手洗い」などによる「新しい生活様式」の実践が求められています。

大規模集客施設でもある博物館は、Withコロナ時代にどう適応していけばよいのでしょうか？立ち止まることはできません。

九州・沖縄の学芸員は、「だれもがアクセス可能で、知的刺激を受け、学び楽しめる博物館づくり」に必要な「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術(教育普及)」「活かす技術(運営)」を、これまで以上に向上させる必要があると思います。

皆さん、「新しい生活様式」を実践しながら、Withコロナ時代を生き抜く「博物館づくり」を共に学び、考えませんか？

趣旨

研修会の特徴

- 現職学芸員のニーズに沿った研修内容です。
- 講師陣が多彩で、博物館学の今を知ることができます。
- 研修会は自由選択、1講座でも受講できます。
- 研修会は九州・沖縄8県で開催します。
- 感染対策に留意しながら、対面のグループワークを行うので、館種を越えた人的ネットワークができます。

注意事項

- 入場にあたっては、開催会場の感染症対策にご協力いただきます。マスク着用願います。
- 感染拡大の状況により、開催会場が閉鎖となった場合は、研修会を中止することもあります。

研修番号 1

| | |
|----------|---|
| 研修分野 | 梱包技術 |
| 講師 | ヤマトグループ/バルロジスティクスジャパン(株)九州美術品支店社員 |
| ねらい | 「仏像の梱包はどこに注意すればいい?」「紐の結び方って何回やっても覚えられない!」「掛軸を巻くと、いつもタケノコみたいになる」など、作品の取り扱い方、梱包・開梱の仕方を実験的に学びます。 |
| 定員 | 30名(先着順) |
| 受講者像 | 梱包技術に関心がある博物館・図書館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年8月17日(月)10:00-15:00(9:30受付開始) |
| 会場 | くまもと文学・歴史館(熊本県熊本市中央区出水2-5-1) |
| 昨年度受講生の声 | ● 梱包作業に入る前に、作品や資料をよく観察し、ダメージの状態、資料のうち分解可能な箇所などを確認することが大切だと分かりました。● 常に緊張感をもって、対象物・所蔵者に接する真摯な姿勢が、信頼を得ることにつながることを忘れずにしなければ、と思いました。 |

研修番号 3

| | |
|----------|--|
| 研修分野 | 博物館リニューアルと照明計画 |
| 講師 | 藤原 工(株式会社灯工舎代表取締役) |
| ねらい | 「リニューアルに当たって、照明計画はどう考えていけばいいのだろうか?」「学芸員と財政担当者、設計施工業者の折衝で留意することは?」「LEDはどんなものを選んだらいいのだろうか?」などの疑問を、「武雄市歴史資料館」の事例から学びます。 |
| 定員 | 30名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | 博物館リニューアル・照明計画に関心がある博物館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月1日(火)10:00-17:00(9:30受付開始) |
| 会場 | 武雄市図書館・歴史資料館(佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304-1) |
| 昨年度受講生の声 | ● LEDの特性や光源の仕組みなど、照明器具の基本的な知識を得ることができました。あわせて、LED照明を探す際に、どの数値に注意すればいいのかが学ぶことができました。 |

研修番号 5

| | |
|----------|--|
| 研修分野 | 資料保存 |
| 講師 | 木川 りか(九州国立博物館学芸部博物館科学課長) |
| ねらい | 今回は、「科学の力、人力で博物館資料を守る」をテーマに、「展示環境、収蔵環境では何気をつけたいか」「光、汚染物質、虫、カビにどう対処するか」「災害時にどう対応するか」などを木川りか先生の講義と中津市歴史博物館の取り組みから学びます。 |
| 定員 | 40名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | 資料保存・修復に関心がある博物館・図書館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月8日(火)13:00-17:00(12:30受付開始) |
| 会場 | 新中津市学校(大分県中津市殿町1385) |
| 昨年度受講生の声 | ● 資料保存において、何か起こってからではなく、予防が大事だということが分かりました。日頃から、資料の保存環境のチェックや、掃除等で虫やカビの発生を防ぐことが大事だと思いました。 |

研修番号 7

| | |
|----------|--|
| 研修分野 | ユニバーサル・ミュージアムⅡ(多文化共生とやさしい日本語) |
| 講師 | 佐々木 秀彦(〈公財〉東京都歴史文化財団)、高尾 戸美(多摩六都科学館)、村田 陽次(東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課) |
| ねらい | 子どもから高齢者、そして在留外国人に向けた「ユニバーサル・ミュージアムづくり」の一環として、「やさしい日本語」を取り上げ、その基本的な考え方の講義、そして東京都での取り組み事例紹介、さらに展示パネルやキャプションを「やさしい日本語」作成するグループワークを通じて、「すべての人に開かれたアクセス可能な博物館」の意義を考える時間とします。 |
| 定員 | 30名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | 多文化共生、やさしい日本語に関心がある博物館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月15日(火)10:00-17:00(9:30受付開始) |
| 会場 | 鹿児島国際大学(鹿児島県鹿児島市坂之上8-34-1) |
| 昨年度受講生の声 | ● 今年度初めて開設する研修会です。「やさしい日本語」のオンライン講義、そして東京での事例を聞いて、午後から博物館の作品解説シートを「やさしい日本語」に再編成するワークショップを行います。Withコロナ時代の博物館を参加者同士で考える時間になりたいと思います。 |

研修番号 2

| | |
|----------|--|
| 研修分野 | 展示グラフィック |
| 講師 | 熊谷 淳一(株式会社ノイエ代表取締役) |
| ねらい | 最近ではポスター、チラシ等広報物を予算の関係から学芸員が作成することが多くなっています。今回は視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。 |
| 定員 | 30名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | ポスター、チラシ、パネルのデザインで悩んでいる博物館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年8月28日(金)10:00-17:00(9:30受付開始) |
| 会場 | 宮崎県総合博物館(宮崎県宮崎市神宮2-4-4) |
| 昨年度受講生の声 | ● センスがなくても、チラシを制作するための4つの要素「メリット」「コピー」「デザイン」「個性」をおさえることで、集客につながるチラシを作ることができる学びました。● 徹底的に「見る側・読む側」の立場に立っているかどうかを、今後の評価軸にしていきます。 |

研修番号 4

| | |
|----------|---|
| 研修分野 | ユニバーサル・ミュージアムⅠ(Withコロナ時代の「さわる展示」を考える) |
| 講師 | 広瀬 浩二郎(国立民族学博物館准教授) |
| ねらい | Withコロナ時代に入り、改めて「なぜさわる必要があるのか?」を問いかける広瀬浩二郎先生の講義、そして参加者が所属する博物館等の「さわる展示」の現状報告をもとに、これからの博物館活動を考えます。 |
| 定員 | 30名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | ユニバーサル・ミュージアムに関心がある博物館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月4日(金)10:00-17:00(9:30受付開始) |
| 会場 | 九州産業大学(福岡県福岡市東区松香台2-3-1) |
| 昨年度受講生の声 | ● 障害者だけではなく、健常者にとっても「じっくり」触るという体験はそれだけ資料と向き合うことであり、言葉での観賞だけではなく「触る鑑賞」がとても有効だということも学ぶことが出来て良かったです。 |

研修番号 6

| | |
|----------|--|
| 研修分野 | 著作権 |
| 講師 | 福井 健策(弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学藝術学部客員教授) |
| ねらい | 「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権は及ぶのか?」「何処まで似れば侵害なのか?」「PD(パブリック・ドメイン)とは?」など、日ごろ文化芸術・教育に関係する皆さんが悩まれている著作権に関する考え方、対応法を学びます。 |
| 定員 | 80名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | 著作権対応で悩んでいる博物館・図書館・行政・学校関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月11日(金)13:00-17:00(12:30受付開始) |
| 会場 | 琉球大学(沖縄県中頭郡西原町大字千原1) |
| 昨年度受講生の声 | ● 著作物の概念が「思想・感情を創作的に表現したもの」であるということが明確になり、それに基づく、実際の判例なども知ることで、今後の活動に活かせると感じました。 |

研修番号 8

| | |
|----------|---|
| 研修分野 | 展示制作 |
| 講師 | 洪 恒夫(東京大学総合研究博物館特任教授) |
| ねらい | 「テーマは決まり、作例)ストも固まったけれど、さあこれらどう展示しようか?」と、毎回思索する学芸員も多いと思います。今回は諫早市美術・歴史館の展覧会を事例に、「展覧会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。 |
| 定員 | 30名*申込多数の場合は抽選とします。 |
| 受講者像 | 展覧会の企画立案、制作を行なう博物館関係者、大学教員、学生等 |
| 開催日時 | 2020年9月23日(水)10:00-17:00(9:30受付開始) |
| 会場 | 諫早市美術・歴史館(長崎県諫早市東小路町2-33) |
| 昨年度受講生の声 | ● 展示することは「もてなすこと」である。また、展示の効果として見る側に「驚き・発見・共感・納得」が得られることが重要であるということが新たな気づきでした。そのための紐付けした展示の仕方など、実際の展示を見ながら学ぶことができました。● 企画者は「お客様にどう見てもらいたいのか?何を伝えたいのか?」をじっくり考えることが非常に重要だと感じました。苦しくてこそそれをサボらず、企画を作っていくと思いました。 |

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

① 「梱包技術」

■ テーマ

「仏像の梱包はどこに注意すればいいの?」「紐の結び方って何回やっても覚えられない」「掛軸を巻くと、いつもタケノコみたいになる」等々、作品の取り扱い方、梱包・開梱の仕方を実験的に学びます。

■ 講師

ヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株)
九州美術品支店社員(美術品梱包輸送技能取得士)

■ 開催日時

2020年8月17日(月)10:00~15:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

くまもと文学・歴史館(熊本県熊本市中央区出水2-5-1)

■ 内容

10:00 諸注意 10:10 研修開始(A班①「保護材の作り方-薄葉紙の特性と多彩な使い方を知る」、A班②「仏像作品の取り扱い方、梱包の仕方」B班①「掛軸の取り扱い方」、B班②「茶器の取り扱い方」「仕覆の紐掛け」
12:00 昼食 12:40 研修再開(A班、B班の実習内容を入れ替えて実施) 14:30 質疑応答/ふりかえり
15:00 終了

■ 受講者数

33名(熊本26名、福岡6名、宮崎1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の梱包実習で難しかった動作を同僚や後輩に理解

してもらうために、あなたはどんな説明、どんなデモンストレーション(声かけや動作の見せ方)考えますか?

①【梱包材】薄葉紙の表と裏の違いを説明し、最初にどの程度しわが寄っても良いか、厚みはどれくらい欲しいかなど、具体的なお手本を自分が作って見せる。実際にお手本を手にとって触ってもらい、五感で覚えてもらう。

【茶器】茶器を高い所から落とした、落としたらどのようなリスクがあるか等、具体的な事例を話し、意識付けをする。その後、2人1組でそれぞれの茶器の扱い方を観察し、良い点悪い点を話し合いながら練習させる。安全に運べる姿勢を体で覚えてもらう。

【仕覆】完成形の見本と、練習用に紐が短い仕覆・長い仕覆をそれぞれ用意する。見本を前に自分が作業をデモンストレーションしながら、練習用の仕覆を交互に結んでもらい、カンをつかんでもらう。

【掛軸】対面ではなく、同じ方向に立って作業をする。自分の動作をシャドーイングしてもらい(ダンスの振り写しのような感じ)。

【仏像(手)】アンコを手の上に載せたり挟んだりする1回1回のアクションのたびに手を止めて、少し離れて見たり裏側や側面など観察して作業させる。どの部分がカバーできていないかを具体的に指摘して調整してもらう。

【仏像(頭)】顔回りの梱包においては、視線が自分の手元に集中して紐の滑りが起こることが多かったので、手同様1つのアクションごとに仏像のぐりを観察して練習してもらう。

②【梱包材】薄葉紙は全て表が作品に触れるようにするため、まずは表裏を確認もらう。コロナ感染予防のため

手袋を使う場合は手の感触で判断しづらいので、少し光に反射させてつるつるした面が表であることを確認させる。また薄葉紙の繊維の方向があるので、よく見極める。作品の大きさや空間部分をよく見てアンコを作るが、必ず光沢のある表が作品に触れるようにする。

【茶器】茶碗に入れるアンコは、必ず光沢のある表が茶器に触れるようにする。動かないように、箱の四隅に棒状のアンコを箱の隅に寄せる感覚で入れる。

【仕覆】古いものになると、仕覆の紐が通してある部分が弱くなっている場合があるので、紐を引くときは確認しながら絞っていく。紐の結び方は反復練習あるのみ。

【掛軸】軸を出す前に、どのように納められていたか、よく見ておくことが大事。次に掛ける場所を確認する。前に使った釘などないか確認。きちんと軸が掛ける場所に届くか、自分の体と掛ける場所、矢はずの長さを確認してから軸を出す。動作を変える時は、一旦止まってから次の動作に移る。巻き上げる時は、竹の子状にならないよう注意する。

【仏像(手)】必ず二人で作業を行う。行う前にお互いの動作の順番を確認する。掌にのせるアンコと、手の甲にあてるアンコを一人が持って、もう一人が紙紐で結ぶ、全体を包む動作を行う。

【仏像(頭)】必ず二人で作業を行う。まずは作品自体をよく見て、弱い部分、危険な場所はどこかを確認する。作品を守るため必要な場所にアンコを入れていく。紙紐をかける時も二人で確認し、一番強い場所に結んでいく。

質問2

4名の講師は、九州各県の博物館の展覧会で梱包、展示を経験していました。講師の体験談から印象に残った、言葉や現場でのコツをまとめなさい。

①【掛け軸】「実際の現場では初めから借用品の箱が壊れていたり、あるべきはずの部品がなかったりします。やはり蓋を開けた最初の状態を覚えておくのは大事。『あの部品が無い』と焦らないこと」「基本はたわみなくタケノコ状にならないように巻くことになっていますが、実際の作品が既にクセがついてタケノコになっているならそれに合わせた方がいい。無理にきれいに巻こうとすると却って作品を傷つけます」

現場でのコツ

まずは自分で基本の動作を覚え、現場においては事前によく観察し作品の状態に合わせて動作を引き算することも大事。

【仏像の手】「動画では手首に紐をかけて結び目を隠す

ために回したりしていましたが、実際にはああすると破損の危険性が高いのでまず出来ません。場合によってはアンコすら重ねられない時がある。基本として知っておく分にはいいけれど、現場では作品の状態が第一です」「現場に到着すると、実際の作品の様子が前情報と違う場合が多いです。慌てずに現場にある資材は何が使えるか?どこが弱いか?と観察することが大事」「きれいに丁寧に作業するのはいいことだけど、現場においてはモタモタしていると『この人に作品を預けて大丈夫なのか?』と職員さんや依頼主に不信感を与えかねません。スピーディーに作業をこなすのも重要です」

現場でのコツ

基本は大切だが、それにとらわれすぎて実際の作品に合わせた対応をおろそかにしないこと。まずは現場で作品をよく観察し、段取りをスタッフで話し合った上で作業はスピーディーかつ的確に行うよう努める。

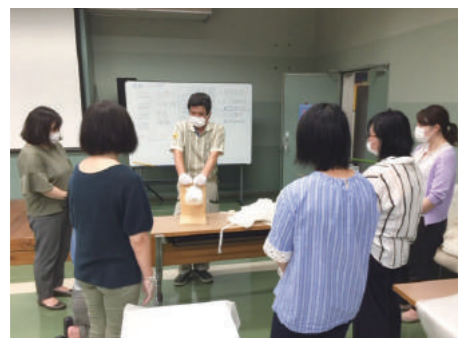
【仏像の頭】「基本的にアンコは弱いところを守ればいいので、過度に厚くする必要はありません。逆にアンコを巻き込んで紐を巻くと作品を傷つけるので耳の下やアゴなど注意して作業してください」

現場でのコツ

アンコの厚みや幅は作品の弱い部分の大きさに合わせて作るようにする。大きければよいというものではない。カバーしたいところと紐で圧をかけないところのメリハリを意識して梱包する。

② 貴重な文化財や作品を前にすると、興奮や緊張状態になることも多くあります。そんな中でも落ち着いて、作業に取り組みたいです。梱包は品物に直接触れて行う作業なので、もしかすると…という事前の気づきと対策、準備の必要性をとっても感じました。基本的な手順を教えていただいたとおりにできるようになることを目標に回数をこなすことで、より工夫できる場所の発見につながればと思います。また、基本の所作を頭に入れることで、落ち着いた作業ができ、その余裕がまた、より良い作業につながるように思いました。

③ やはり経験を重ねることが大事だということが印象に残った。梱包する資料もその状況も現場によって異なるので、そのときに最良の判断をするためには、経験を通していろいろな技術を身に付けていくことが大切であり、一番勉強になるのだと感じた。事前に、映像資料「学芸道」を見た上で、この研修に参加したので、実践で理解することが多くあった。



「仏像の手」の取り扱い方



「茶器」の取り扱い方

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

② 「展示グラフィック」

■ テーマ

最近ではポスター、チラシ等広報物を予算の関係から学芸員が行うことが多くなっています。今回は視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。

■ 講師

熊谷 淳一 (株式会社ノイエ代表取締役)

■ 開催日時

2020年8月28日(金)10:00～17:00 (9:30～受付開始)

■ 開催場所

KITENビル8階中会議室(宮崎県宮崎市錦町1-10)

*宮崎県総合博物館から変更

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示グラフィック」の悩みの共有 10:30 グループワーク①「他館のチラシデザインの相互評価」
11:00 講義①「チラシ作りの基礎<チラシの4つの重要要素>」 12:10 昼食 13:00 グループワーク②「チラシの改善点を話し合う」 13:15 グループ発表「チラシの改善点を説明する」 14:00 講義②「チラシデザインとキャッチコピーの基本技術」 14:50 休憩 15:05 講義③「展示パネル制作の基本技術」 15:55 休憩 16:05 グループワーク③「講義・グループワークを通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 16:35 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

14名(宮崎6名、福岡3名、熊本2名、鹿児島2名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で熊谷先生の講義、演習(改善案の講評)から学んだことは何ですか?

① 今回の研修会で一番の学びは、「チラシをはじめとした展示グラフィックは、見る人の心を動かすためのツールだ」ということです。これまでチラシを作成する際、正確な情報提供ができていたかに重点を置いていました。公文書と似たような考えで、作成していたように思います。そのため、「チラシはインフォメーションではなくコミュニケーション」という熊谷先生のコメントが心に残りました。研修会を通して、見る人に面白いと感じていただけるか、お客様がどのような点に興味をもっているか、ニーズにあわせたデザインになっているかなど、マーケティングの視点の重要性に気づきました。

② 今回の研修を通じて、チラシ作りの重要要素やコピーライティングの6つのステップなど、たくさんのことを学びました。特に印象に残っているのは「チラシはアートではなく、デザインである。」の熊谷先生の一言でした。デザインの目的は興味を持ってもらい、来館者を増やすことなので、「何を伝えるのか?」がデザインよりも重要なことがよく分かりました。「〇〇展を〇月〇日から開催するので来てください」ではなく、「どう楽しそうなのか?」「どう役に立ちそうなのか?」「どう好奇心や興味を満足させてくれるのか?」を明記すること、ターゲットにきちんと「伝えたいこと」「メリット」を提示した方が集客に繋がることを学びました。

③ これまでの自作のグラフィックは、いかに独りよがりであったかを思い知りました。受講生との相互評価をとおして、制作するための4要素がしっかりと頭に入り、「この部分はそこそこ及第点」「この部分はまったくできていない!ショック…」と明確に分かりました。熊谷先生が口を酸っぱくしておっしゃっていた「だからなに?」が脳裏に焼き付き、そのあと、ラジオから聴こえるキャッチコピーや、目に入るデパートの広告サインなど、いちいちキャッチコピーや説明をチェックしている自分がありました…。来館者がどのような情報を求めているの

かを知ること、それを提供できるフライヤーをつくることを学びました。私たちはデザインのプロにはなれないけど、文章との関わりは日々繰り返しているのだから、改善しやすい内容だと思います。私はもっとチラシを手にとってくれた人に、行きたいと思ってほしい!という気持ちを持たないといけないうだな、と思いました。

質問2

今回の「展示グラフィック」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の印刷物、解説パネル、キャプション等の展示グラフィックで注目したいポイントは何か?

① チラシに関して、キャッチコピーに注目していきたいです。どのような人をひきつけようとしているのか、どこを押しているキャッチコピーをみることで、どのような層に向けているのかを見ることができ、展示の特徴を捉えることができるのではと思います。他館のチラシを批判的に見ることで、今後の企画のアイデアにつながっていくという確信が持てました。

② 今後は、キャッチコピーや小見出しの振り方のつけ方を、他館から学び取っていききたいと思います。残念ながら、これまでほとんど小見出しをつけていなかったのが、事例収集に努めていききたいと思います。また、私は文字列やフォントの配置で毎回まとまらず苦心しているので、どうすれば統一感のある配置ができるのか、事例収集やデザイン関係の書籍等から学び取っていききたいと思います。

③ 私自身はこれまで図工や美術の通知表は1～2ばかりの低空飛行でしたので、「デザイン」といわれると身構えておりましたが、講話の中にありましたように書体・大きさ・配色など抑えるべき基本を示していただいた事で、まずは既存の改善点を図り、今後の展示に取り組んでいきたいと考えております。キャッチコピーは自身のセンスがなく道りが遠そうですが、伝えたいテーマに合わせた色の組み合わせと書体選びは、特に全体の雰囲気を考えて選ぶという意識が無かった為、今後注力していきたいと思っています。

その他、字の大きさ、行間などはチラシだけでなく展示パネルについても直ぐに取り組める課題だと思いますので、まずは既存のものから改良していきたいと思っています。

質問3

評価シートやマトリックスは今後どのように活用したいですか?

① これまでチラシ等を個人的な感覚で作っていましたが、職場内や第三者等の意見を聞きながら、評価シートを用いて客観的な意見を取り入れて作成するべきであると思いました。また、外注する際には、マトリックス等を使ってイメージを伝えることで、具体的に思いを伝えられるのではないかと思います。

② これまでチラシを作成する際、どのような指針で作ればよいかわからず、自分の感覚をもとに作っていました。自己流で完結させるのではなく、いただいた評価シートやマトリックスを指標として活用させていただきたく思います。また、課内でも共通した評価の基準がなく、個々人の好みで評価していた面もありましたので、組織内での共通した基準としても活用させていただきます。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

① 学芸員職を置かない自治体職員であるため、複数の資料館等の管理を業務のひとつとして行っている状況であり、各館の展示も昔からの状態が残っている状態です。個人的には学芸員資格を持っており、展示の見直し等を考えています。本研修では、単純にチラシを作るというだけでなく、どのような企画を練ってどのような人に来てもらうかという視点が大きかったので、企画の大切さを思い知りました。今後の企画立案の際には、チラシも意識して全体的な世界観とマーケティングを組み立てていきたいと思いました。講義中にもありましたが、自治体ではちらし等が形式的であり、意味を成さないものがあります。職場でも、今回の講義の内容を広めて、全体的な技術の向上につなげていきたいと考えています。また、普段は他の館との交流がないため、各館のチラシの作成状況等の意見を聞いたのは、とても参考になりました。

② 講師の熊谷先生から直接評価をいただけたことが一番良かったと感じております。作成したチラシが講義で学んだ内容にどれくらい近づけているのか自分だけでは判断しづらかったのですが、その場で具体的に指摘していただけたことで講義の理解が深まりました。また、歴史系や美術系などでそれぞれ異なった視点があり、専門分野の異なる参加者の皆様と意見交換できたのも良かったです。



講義風景(熊谷先生)



チラシデザインの相互評価

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

③ 「博物館リニューアルと照明計画」

■ テーマ

「リニューアルに当たって、照明計画はどう考えていけばいいのだろうか?」「学芸員と財政担当者、設計施工業者の折衝で留意することは?」「LED はどんなものを選んだらいいのだろうか?」などの疑問を、「武雄市歴史資料館」の事例から学びます。

■ 講師

藤原 工 (株式会社灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2020年9月1日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

武雄市図書館・歴史資料館(佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304-1)

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示照明」の悩みを共有す 10:30 講義①「展示照明 - 基礎からライティングまで」 12:00 昼食 12:50 演習①「武雄市歴史資料館の照明について」 13:20 講義②「博物館リニューアルに当たっての照明計画の留意点」 14:50 演習②「照明器具の違いを調べるI」 15:30 休憩 15:45 演習③「照明器具の違いを調べるII」 16:25 質疑応答 / ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

26名(佐賀14名、福岡9名、京都1名、東京2名)

■ 事後アンケート

質問1

午前の藤原先生の講義「照明の基礎知識」を聞いて、印象に残っている事をお書きください。

① LEDには紫外線、赤外線が含まれておらず、蛍光灯に比べ、展示に適切であると考えていましたが、必ずしもすべてのLEDが適切というわけではないということに驚きでした。LEDは大変明るいですが、明るすぎるがゆえに照度の調整が必要だということ、そのままLEDを導入するだけではいけないということがよく分かりました。この先、当館でLEDを導入するようなことがある時には、注意したいと思います。

② 藤原先生がおっしゃった「作品を見るときに価値を最大化しなければ美術館の意義がない」というお話が印象的でした。八女市で管理している田崎廣助美術館の照明がうまく調整できずに悩んでいましたが、館の照明でどこが嫌か、どこが美術品によくないかなどしっかり分かった上で調整や工事をしなければと思いました。

また、LEDに対する知識が全くなかったので、青、紫、赤が紫外線、赤外線として影響してくるものがあるとか知ることができてよかったです。

③ 光による損傷(波長制御、照度制限、累積照度)や演色性と分光分布については、本館展示物は考古資料が主体で、有機物だけでなく無機物を展示することも多く、色彩豊かなものが少ないので、そのあたりのバランスを考えて照明計画を立てる必要があると思いました。色温度や点光源と面光源については、考古資料でも展示内容に応じて十分考慮する必要があると思いました。光のメリハリによる誘導やサバンナ効果については、ベース照明の設計の中で検討が必要と思いました。

④ 普段、施工管理者として照明の設置検討を行う際には、部屋用途に合わせた色温度や必要照度を満たす光束数の器具及び、利用者の方に悪影響を及ぼしにくい配置等の検討は行っておりましたが、照明器具から発される紫外線・赤外線による物質等への影響については

考慮したことが無く、初めて学ぶことが出来ました。

質問2

武雄市歴史資料館の資料をもとにした、壁付きケース、覗きケース、アイランドケースなどの照明技術指導で、印象に残っている事、これは試してみたい事をお書きください。

① ハイケースが、メインのものを展示するわりに目立たず、地味な印象があるとの意見は、まさにその通りだと思いました。照明がバラバラであるからということですが、学芸員側が照明に関する知識を身に付け、業者に製作の依頼をする際に注意していれば、もっと優れたハイケースを導入できていたと思います。藤原先生の講義をきっかけとして、照明に関する知識をこれからどんどん学んでいきたいです。

② 研修後に、美術館に戻り覗きケースを見てみると、今まで気づいていなかった照明がありました。覗きケースの照明に仕切りなどつけて照明の効果を上げたり、スポット照明にレンズを付けて照明を拡散させたりするなど、試してみたいと思います。

③ 実習で使われた3種類のスポットライトのメーカー、価格、特徴、使い分けを伺えばよかったです。既存の照明の生かし方は、予算や時間がない普段の展示で実践していきます。ライトの拡散や絞りはあまり活用してこなかったのですが、少しの手間で見違える展示となることを実感しました。照明で展示品を引き立てることができるよう工夫したいと思います。

④ 少しの工夫で、見え方が全く違うことに驚きました。特に壁付きケース内の蛍光灯にカバーをつけ、光をコントロールするのは、すぐにでも実践できそうで良いなと思いました。当館は元々医院として建てられたものを美術館として改修して使用しています。予算も限られている上、造りも美術館としては不向きなところも多々あるため、あくまでも現状の作りのままで対策を講じるという講義内容は、非常に参考になりました。

質問3

午後の藤原先生の「博物館リニューアルと照明計画」について、印象に残ったことや今後のリニューアルなどで留意したいことは何ですか。

① LED照明へリニューアルするにあたって、博物館学芸員が保存・展示の視点で考えなければならないことを実践的に学ぶことができ印象に残りました。LED照明の特性や館との相性に留意して、リニューアルに取り

組んでいきたいと思っています。

② 当館の展示ケースの照明は、光が中央に集中するなど位置が良くなく、資料に影響を与えてしまうということでした。しかし、銀のアルミニウムのようなものを1枚挟み込むことで、光が分散して資料に与える影響が減ったことには驚きでした。

③ 館のリニューアルに際して、現在の状況がどのようにあり、課題が何なのかを捉え直すことが一番心に残りました。学芸・事務方と共通認識を持って課題を捉えないと闇雲になってしょうがないとも思いました。

④ 武雄市歴史資料館の実際の展示会場を見たことで、八女市に帰って調整できる場所を考えたことができたと思います。直管LED内の粒は数年ごとに変更されることがあるので、工事でLEDを入れる際は何本か交換予備として購入しておくべきというお話は覚えておかなければと思いました。また、研修終了後藤原先生や灯工舎の高橋さんに美術館の悩みをご相談したところ、翌日現場を見に来ていただけました。照明についてどなたに相談してよいか全く心当たりがない中での研修で、プロの方にご相談でき、大変良い機会でした。ありがとうございました。

⑤ LED化が単純でないことを知り、より理解を深める必要があると思いました。基本的にはLED照明を考えることになると思いますが、場合によっては、ハロゲン電球や蛍光灯との比較を行う必要があると思いました。

⑥ 普段、業者に勧められるものを選び、類似品と比較する機会が少ないので、様々なメーカーや種類の製品を横断してご教示頂ける機会はとても貴重でした。ライトを含む展示室のリニューアルは、ライトやケースの種類、展示品の様々な想定を必要とする総合的な専門知識と周到な展示計画によって成り立つことを改めて実感致しました。漠然と展示の雰囲気を作るのではなく、作品の保全や来館者の鑑賞のために根拠のあるデータを用いた展示計画でリニューアルを行っていく必要性を痛感しました。当館も事務室で色校正を行い、収蔵庫やその前室で検品をしますが、ライトは「工場用」でした。時には収蔵庫の前室で印刷会社と色校正も行っていたものの、それ以前の問題に気付きました。先生の本を読んで色々な美術館・博物館の照明を見に行きたいと思っています。



講義風景(藤原先生)



照明器具の違いを見る

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

④ 「ユニバーサル・ミュージアムⅠ」
(Withコロナ時代の「さわる展示」を考える)

■ テーマ

Withコロナ時代に入り、改めて「なぜさわるが必要なのか？」を問いかける広瀬浩二郎先生の講義、そして参加者が所属する博物館等の「さわる展示」の現状報告をもとに、これからの博物館活動を考えます。

■ 講師

広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館准教授)

■ 開催日時

2020年9月4日(金)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学 (福岡県福岡市東区松香台2-3-1)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義「Withコロナ時代の『さわる展示』を考える」 12:00 昼食 12:50 グループワーク
①「他館の『さわる展示』の現状と課題を聞いてみよう」
13:30 事例紹介「3密防止道具を使った『さわる展示』のあれこれ」 14:30 休憩 14:45 グループディスカッション「今後の方策について、いろいろなアイデアを話してみよう」 16:10 休憩 16:25 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

29名(福岡28名、大阪1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか？

① 今回の講義でとても印象的だったのは、「触常者」と「見常者」という言葉です。個人的には、ものに触れるこ

とはとても楽しく、見ることはまた違った情報を与えてくれる方法だと考えています。ただ、これまでは広瀬さんのお話を伺っていると、何となく健常者である自分がそのことを語ってよいのかと考えることがありました。「触常者」と「見常者」という言葉は、とても良い言葉だと思いました。障害がある・なしではなく、異なる文化を持った者同士という対等な立場で、「ものに触れる」ことについて語り合っただけだと大変うれしく思いました。しかし、「触常」という言葉は今回初めて知った言葉だったため、実際にどのように「触常の場」を提供していくのか、これから考えをまとめなくてはいけません。

② 広瀬先生がコロナ渦の中でも様々なことにチャレンジされているお話を聞き、細々とでもとにかくやり続けることが大事だと学びました。また、みんなくの世界をさわるコーナーの「破損するほどさわる子ども」と「さわろうとしない大人」の2極化をどうするのかという話では当館の体験型展示室でも同じような現象が見られるので、これについても改めて考えるきっかけをいただきました。

質問2

午後の「各館からの現状報告」から学んだことは何ですか？

① どの博物館の状況もわが博物館と似ており、共感することばかりでした。コロナ禍を口実になかなか外に出て他の博物館の状況を聞く機会を持たなかったため、大変良い機会になりました。当館では、今回のような館外の研修に参加する機会がなかなか持てません。そのため、研修の内容を、館内の同僚たちと共有することが重要だと感じました。また、今後、できるだけ公務として参加できるよう働きかけていきたいと思えます。複数の博物館がボランティアとの関係維持の重要性を述べられていました。当館は、再開と同時にサポーター(ボラン

ティア)活動を再開しました。各館のボランティアを掛け持ちしている人が多く、各館での活動ができない分、当館に活動に来た人が多くいました。しかし、来館者がほとんどおらず、またコロナ対応のため活動内容に制限したため、ボランティアの希望通りの活動を提供できていません。結果的に活動への不満がつのっているように感じています。現状をコロナ禍における一時的な対応として説得していくのか、新しい活動を模索するのか。ほかの館ではどのように考えているのか伺ってみたいと思います。

② それぞれの館のお話を聞いて、ボランティアの方と会えないからこそ、つながりを強く持っていられるように、美術館通信や手紙のやり取りを行い、館の存在をアピールするようSNSでの発信を行う・時間の活用としてスキルアップの為の勉強会、コレクションとホームページなど今までの振り返りを行っていたことなどを聞き、人とのふれあい、つながりは生きていく上で欠かせないものなので、つながりを持つための工夫が必要であるということを知り、コロナ自粛中だけでなく、博物館・美術館だけでなく、身近な人とコミュニケーションをとることで、コミュニティの豊かさにつながるのだと思いました。

質問3

午後の「目が見える触常者による気づき体験」を通じて、いろいろな「もの」に、いろいろな「方法」で触ると、指先を通じていろいろな「こと」が想像されたり、いろいろな「言葉」がこぼれてきたりしました。この体験から改めて気づいた「触る」意味について、あなたの感想をお書きください。

① 日頃、どれほど視覚からの情報に頼っていたかを知りました。葉っぱは、一見するとただ色が違うだけに見えないものの、集中して触ることで厚みや硬さ、水分量の違いなど、得られる情報は多かったです。視覚情報に頼り過ぎると誤解や錯覚が生じるため、正しく理解するためにも触ることは重要だと思います。また触ることは感じることであり、感じることは形容しがたいことでもあると思うので、この感覚はいったい何だろう、なんと表現しようかと頭を巡らせることで思いがけないオノマトペが出てくるなど、自分も知らない自分と向き合うことができる体験でもあると思います。

② アイマスクをした状態では、普段よりも指先に神経を集中させて触っていたようで、小さなこと(葉っぱの先が尖っていることや、うねっていて平面ではないこと、カサカサした音になること…)にも気づくことができました。そして自分が感じたことを言葉にする時、思った以上に「カサカサする」「つるつるとしている」など擬音語や

擬態語を使っているなとも思いました。普段の私たちは視覚からの情報に頼り切っていて、こうした小さなことを見落としていることが多いのだろうと感じました。だからこそ、見るだけでなく「触る」行為を通すことでその対象をもっと知ることができるのではないのでしょうか。そしてこのことこそが広瀬先生のおっしゃっていた「目が見える触常者」になるための一歩ではないかと思えます。博物館という施設においては、コロナ渦であったとしても「見ること」と「触ること」どちらにも力を入れることが必要だと感じました。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうかなあと思う点があればお書きください。

① 実際に研修で体験してみて「触る」という行為には、つかむ・なでる・ふれる、など様々な触り方があると改めて気づかされました。こういった触るという行為から、緒方先生がお話されたように葉っぱから植物の活動の話へ広がっていったり、展示用品から展示を学ぶきっかけとなったり、形をイメージして全体を想像し実感することが展示や学習において大きな広がりを持っているのだと感じました。当館が指定管理を受けている水城館には、水城跡の敷粗朶で使われたアワブキなどが植えてありますので、研修のようにもぎたての葉などを今後の学校への出前講座や教育学習などで活用してみたいと思えます。

② 特別な素材でなくても、十分に触る楽しみ・触って分かる学びが体験できることを知れたことが大きな収穫でした。大切なのは、緒方先生のワークショップのように、「どんなことを感じる?」「何が分かった?」など、各人が感じる自由な答えを導く声かけや仕掛け、運営の方法なのだと感じました。さわる展示が「珍しいものを触れた」「面白かった」で終わらないよう、1つでも多くの学びを得てもらうため「ただ触れる資料を置いておく」だけでない館側の態度も必要なのだと感じました。

③ コロナ禍という未曾有の災害の中で、広瀬先生や他館の方々がどのような思いで、どのように乗り越えようと動かれているかが分かり、大変参考になりました。また、「触る」を禁ずる風潮がある中、だからこそ大切なんだという発信が大切であり、それがゆくゆくはユニバーサル社会、ユニバーサル・ミュージアムにつながっていくと感じたので、スリープレスの博物館を目指して、様々な視点をもって試行錯誤していかなければと思いました。



講義風景



アイマスクをして触察体験

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

⑤ 「資料保存」

■ テーマ

「科学の力、人力で博物館資料を守る」をテーマに、「展示環境、収蔵環境では何に気をつけたらよいか」「光、汚染物質、虫、カビにどう対処するのか」「災害時にどう対応するか」などを木川りか先生の講義と中津市歴史博物館の取り組みから学びます。

■ 講師

木川りか(九州国立博物館学芸部博物館科学課長)

■ 開催日時

2020年9月8日(火)13:00~17:00(12:30~受付開始)

■ 開催場所

新中津市学校(大分県中津市殿町1385)

■ 内容

13:00 自己紹介、「資料保存」の悩みの共有 13:30 講義「科学の力と人力で博物館資料を守る」 15:00 休憩、中津市歴史博物館へ移動 15:20 演習「中津市歴史博物館の資料保存の現場を見てみよう」 15:35 中津市学校へ移動 16:10 質疑応答/ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

16名(大分11名、福岡5名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で木川先生の講義から学んだことは何ですか?

① 資料保存をするにあたって大事なことは「人間の健康と同じように考える」と言う事が、なるほどと感じました。この考え方は水族館で展示している生き物と同じ考え方だと思い、共感出来ました。今までは博物館資料は生き物ではないので、そのような考えを持って観ることがなかったので、今後は生き物を見る視点で見られればと感じました。

② 九州国立博物館の修理室の天井が高い問題を解決した話を聞いて、少し勇気を貰いました。虫の侵入を建物のせいにして、問題解決をあきらめそうになっていましたが、もう一度原因を探り工夫できることはないか考えようと思いました。また、最近の殺菌・殺虫燻蒸方法、災害時における資料の応急処置方法などの話を聞いて良かったです。

③ 木川先生が最初におっしゃった「博物館・美術館・図書館は、大切なもの・記録資料をお預かりし、後世に伝えていく役割」という言葉が印象に残りました。最新の虫菌害対策の知識と技術、部署を越えた人のつながりによる館をあげての取り組み等を知ることができました。

④ 地震や火事の対策は、意識していましたが、近年水害が多くなっているが、具体的にどのように対処すべきか知識がなかったので、水害にあった場合の対処法を詳しく教えていただき助かりました。一般的な話に加え、それぞれの事例について木川先生の九州国立博物館での取り組みを聞いたのがとても参考になりました。

質問2

今回の研修会で、中津市歴史博物館の見学をしました。館内の見学、そして各所の説明から気づいたことがあればお書きください。

① 展示の構想、収蔵庫等が建設計画の時に現場との意見交換が密に取れ、反映された博物館だと感じた。展示スペースだけでなく、バックヤードも職員が使いやすいように工夫されていて、使いやすい施設なんだろうなと感じた。

② ガス燻蒸や冷凍庫を常備しているほか、必要に応じて投薬燻蒸の出来るトラックを手配するなど、日常的に燻蒸が出来る環境が整備されていると感じました。さらに、バックヤードの部屋数が多く、使い分け出来るのも魅力的です。また、眺望ラウンジと石垣シアターは、石垣の保存と団体客が来た際の導線確保の両方がよく考えられて出来ており、良いアイデアだと思いました。

③ 中津市歴史博物館のバックヤードは資料ごとに収蔵庫が分けられていた点、また燻蒸前・燻蒸後の部屋がはっきり分かれている点など、参考にしたいと思える箇所がたくさんありました。時間が少なかったため、さらっと終わってしまった部分もあったので、また同様の機会があれば1日かけてじっくり見せていただき、今後の館の運営の参考にさせていただきたいと思いました。

④ 建物全体に対して、収蔵庫がかなり広くとられており、また低温処理ができる設備を備え、未燻蒸の資料が分けておける部屋もあるなど、保存の観点においてかなりの意識の高さを感じた。

⑤ 実際に虫による被害の写真を見せていただいたこと、九州国立博物館での虫による被害の実例をまじえてIPMの取組について教えていただいたことは大変有意義でした。

質問3

今回の「資料保存」の研修を受けて、今後、自館で早速取り組みたいことは何ですか?

① 湿度管理の際に、調湿剤(再利用可能)を使用するだけでも1日の温度変化の差を小さくするというデータが採れたという話を聞いて、現在自館の収蔵庫内は節電の観点から、湿度が高い時のみ空調をかけているが、時折強いカビ臭がするので、金銭的に可能なら部分的にでもアートソープなど調湿剤を使ってみてみたい方良いのではないかと感じました。

② 虫による被害の可能性に気づいたときに、徹底的に原因を探ると言う木川先生の姿勢は、すぐにでも真似し

たいと思っています。また、九博でも取り組んだというゴミ箱の改善(特に弁当ガラは食べ残し等もあるので蓋がしっかり閉まるタイプのごみ箱としたこと)は、それほど予算もかからないので当館でも取り組みたいと思いました。

③ 段ボール系の材料の保管場所や取り除き、小まめな館内清掃、見回り、予算申請をより強めてトラップ等の一連の防虫対策の徹底等です。慣習的化している貧弱なマンパワーをどう操縦していくか(悪環境を他の職員たちにも共有していただく)が当館としてまずもっての最大の課題と言えます。

④ ダンボールや巻きダンボールがよくないのは知らなかったもので、バックヤードや収蔵庫など、少しずつ変えていこうにしたいです。

⑤ 収蔵庫内の段ボール等の使用は、できる限り減らしていきたい。

質問4

今後、他館を見学した時に、注目したいポイント何ですか?

① ゾーン分けなど参考にできるところがあれば、注目していきたいと思います。その他に、IPMに力を入れている館の中でも、中津市のように新しいところではなく、築何年も経っているところを見学できる機会があればと思っています。中津市の取り組みや、収蔵庫は大変魅力的でしたが、館全体をリニューアルしなければ真似できない部分もありましたので、また見学の機会があれば既存の古めの施設でのIPMの取り組みについて知りたいと思っています。

② 館内のいろいろなところに防虫用のトラップが仕掛けられていると言う事を、今回の研修で初めて知りました。害虫は展示物にとって大敵であるので、どのようなところにトラップが仕掛けられているのか気になると思います。

③ 建築物デザインではなく、室内に入った瞬間に五感に訴えてくるワクワク感とでも言いましょうか、空間自体の面白み、主役はあくまでも「展示資料」であり、来館者に興味を持たせるダイレクトな教育の場であるかどうか、そのための保管施設の充実を付随させるといえるか、どうかをポイントとして見てみたいと思います。

6-5



講義風景(木川先生)



展示室見学

⑥「著作権」

■ テーマ

「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権が及ぶのか?」「何処まで似れば侵害なのか?」「PD(パブリック・ドメイン)とは?」など。日ごろ文化芸術・教育に関係する皆さんが悩んでいる著作権に関する考え方、対応法を学びます。

■ 講師

福井 健策(弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学芸術学部客員教授)

■ 開催日時

2020年9月11日(金)13:00~17:00(12:30~受付開始)

■ 開催場所

琉球大学(沖縄県中頭郡西原町大字千原1)

■ 内容

13:00 開会行事 13:15 講義①「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権が及ぶのか?」
14:15 休憩 14:30 講義②「著作権の限界」「アーカイブの挑戦と権利の壁」 15:30 演習①「皆さんからの質問に答える(事前アンケートを基に)」 16:00 休憩
16:15 質疑応答/ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

65名(沖縄63名、福岡1名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか?

① 今までうっすらと「人の作ったものを勝手に使ってはいけない」程度に認識していた著作権について、権利の及ぶ範囲や例外がある程度明確に理解できたのは非常に

有意義でした。最後の質疑応答では様々なケースの質問に答えていただけたので、今後もし実際に著作権に関わる問題に直面した時に、どのように考えていけばよいか手掛かりになったと思います。

② 著作権が発生する著作物について、法律では具体的にまとめられているが、裁判などで争う時の対象は、その中の表現という抽象的なものであることが分かった。そのため、法律だけを見ればなんとなく判断できそうだと思うものも、いざ目の前に実例が出ると、曖昧なものが多いということを実感した。スイカ写真事件や、先生の著作に出てきた『ロミオとジュリエット』『ウエストサイド物語』の判例など、立場が変われば援護も反論もできるところに難しさを感じた。また、パブリック・ライセンスなど、著作権者自ら制限を緩めるような考え方はおもしろいと思う。SNSの利用者が増加する中で、著作物を文化の発展に寄与させるなら、制限緩和も必要だと感じた。以前、とある組踊のウェブサイトで、新しい創作組踊が出ることで、元の組踊も発見され組踊界が発展していくという内容を読んだ(当該サイトを探したら403エラー)。パブリック・ライセンスによる制限緩和は、まさにこのような機能を持つと考える。権利を保護するのも重要だが、それだけが著作権保護ではないということを忘れないようにしたいと思った。

③ 著作権や法律という言葉を知ると、執筆や図録作成、レファレンスなど業務以外は自分から遠いと感じがちですが、思った以上に日常生活の中にあふれていると感じました。また、アーカイブなどを含め著作権を取り巻く状況は、年々変わってきていることを改めて感じました。今一度著作権について勉強していきたいと思いました。さらに、講義後にSNSなどを少し気にしてみると、著作権に関わる悩みを抱えている事例や、図書館での資料コピー

など今回講義で話題になったような内容で躓いている人をかなり見かけました。お客様対応をする場面で著作権が関わった場合、私たち自身が著作権をきちんと理解した上で対応する必要があると感じました。同時に著作物の利用方法を利用許可等する場面で、法を順守させた上で利便よく著作物や知的財産を利用する方法を提示していくことも必要はないかと感じました。

④ 著作権は、これを巡ってのトラブル数も多く罰則も重いものですが日常の活動で何気なく違反を重ねてしまうものであると、改めて感じました。資料に関する借用・寄贈・譲渡の際には、慎重な契約が重要。研修会中で話された、利用の範囲、利用期間、利用の対象といったポイントについて、現行の業務で使用される契約書類の記載など、意識的に細かく見返してみようと思います。

⑤ 今まで、著作権や肖像権について、セーフかアウトかという基準で考えていました。そのため、グレーゾーンの問題に直面したときにどうしたらいいかわからず、苦手意識がありました。今回の講義で、わかりやすい定義や例外規定などを知り、個々の事例をこれに照らし合わせればいいとわかり、気が楽になりました。また、「常識的な感覚と照らしあわせたときのリスクを考えるといい」という旨のアドバイスも、問題を対処するときの基準にしたいと思います。

⑥ 著作権の例外規定について、最新の改正情報も盛り込まれていて、お話しも面白くてとても理解しやすかったです。特に、図書館内での私的複製について、31条の図書館等での複製サービスとの境界が法律の観点からもあいまいな部分だが、施設の管理上の観点から制限できる点など、改めて館全体で考えていきたい点だと感じました。また、質疑応答の際に、入手困難資料の複製・保存についての解説で、媒体がVHSというだけではまだ入手困難と言えないという点や、AV資料の館内での上映について、38条1項の非営利の上映にあたる場合は、AV資料の購入の際に契約で制限されていなければ上映が可能であるなど、実際の業務にかかわる疑問点も解決していただきました。

質問2

今回の研修会を受けて、今後、自館はもちろん、他館そして団体、個人の活動で気をつけたい著作権のポイントは何か?

① コロナ禍の中での博物館活動として、現在当館ではWEB企画展に注力し始めています。WEB展示の性質上、不特定多数がコンテンツを閲覧利用できる状況となるので大きなトラブルを生まないよう、これまで以上に著作

物の扱いをシビアに考えて展示を企画していきたいです。

② こう決まっている、という硬直的な法の振りかざしに陥らないよう、権利の侵害をしないことは当然として、創作物の価値を社会にどれだけ還元できるか、より情報をオープンに、ということも博物館の役割として意識していきたい。著作権者との合意形成過程を、業務の初期段階にきちんと組み入れなければならないと思った。取り交わし文言の作成や、権利者への十分な説明ができるように、様式を作るなり説明用のガイドラインを自分で持っておきたい。また、館内スタッフで対応のガイドラインを共有しておくことも考えたい。

③ 著作物の取り扱いについて、ただ強い規制をかけるのではなく「公共に発信された場合のメリットとリスクの量をシミュレーションして柔軟に対応する」ことを気をつけたいです。肖像権について、資料の判断基準はわかりやすく活用したいと思います。また、この資料については、リスクの量をはかるという考え方についても参考になるので、応用したいです。

質問3

今回の講義を聞いて、著作権に関する新たな疑問点があればお書きください。

① 館内でBGMとして著作権保護をされている楽曲のCDを流す場合、非営利の上演であれば許可のいらぬ例外として認められるかと思っています。当館は現在、入館料無料となっており、展示室の見学において、来館者に費用が発生することはありませんので、提供の対価はないと思っております。しかし、館に勤務する職員は村から給料(報酬)が支払われていますが、こうしたものが「実演家等が無報酬」という観点から見て、問題として指摘されることはあるのでしょうか?というのを伺ききしておけば良かったなと思いました。

② 当館では、公演映像の視聴を有料で行っており、出演者等関係者には承諾を得ているが、書面にして残していないので、今後の事を考えて、書面にして残しておくべきなのか。また、職員のみが資料を使用する前提で保存している資料の著作権を明確にしたものを残しておくべきなのか。といった疑問があります。

③ 肖像権とは、個人のアカウントが特定されてしまうツイッターのアイコン(本人の顔でなくとも、その人とわかるアイコン)や、ツイッターに投稿したツイートも著作物として扱うのかが気になった。もしツイートが著作物ならば、その投稿内容を意図的に改変して他者に拡散する行為なども、著作権法としてはどう見るのかが気になった。



参加者の2倍収容の会場準備



福井先生近景



講義風景(福井先生)

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

⑦「ユニバーサル・ミュージアムⅡ」

■ テーマ

子どもから高齢者、そして在留外国人に向けた「ユニバーサル・ミュージアムづくり」の一環として、「やさしい日本語」を取り上げ、その基本的な考え方の講義、そして東京都での取り組み事例紹介、さらに展示パネルやキャプションを「やさしい日本語」作成するグループワークを通じて、「すべての人に開かれたアクセス可能な博物館」の意義を考える時間とします。

■ 講師

村田 陽次 (東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課)
佐々木 秀彦 (<公財>東京都歴史文化財団)
高尾 戸美 (多摩六都科学館)

■ 開催日時

2020年9月15日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

鹿児島国際大学(鹿児島県鹿児島市坂之上8-34-1)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:10 オンライン講義「多文化共生とやさしい日本語」(村田陽次) 10:55 休憩 11:05 事例紹介①「都立文化施設の取り組み」(佐々木秀彦) 11:35 事例紹介②「多摩六都科学館の取り組み」(高尾戸美) 12:20 昼食 13:10 鹿児島国際大学ミュージアム見学 14:00 ワークショップ「博物館のワークシートをやさしい日本語で作成してみよう」 15:00 休憩 15:15 発表、講師による講評 16:00 質疑応答/ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

30名(鹿児島21名、宮崎2名、福岡4名、東京3名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で、村田先生の講義から学んだことは何ですか？

① 在住外国人の国籍が多様化している今日、やさしい日本語は、英語・中国語を抑え最も需要がある。やさしい日本語で文章を書く際には、情報の優先度の整理、文章の単文化、主語の明確化、語彙の難易度確認など様々な点に注意する必要がある。しかしながら、昨今はやさしい日本語化支援ツールが充実しており、やさしい日本語を自館に導入しやすくなっている。やさしい日本語は在住外国人のみならず、訪日外国人や子ども・高齢者・障がい者とのコミュニケーションの場面でも役立ち、社会全体に不可欠なものである。博物館内の全ての場面で同じレベルの「やさしい日本語」を使うべき、という訳ではなく、時と場面に合わせ、自分なりのレベルやルール設定の「やさしい日本語」を確立していく必要がある。

② 「在住外国人、非英語圏の観光客へは、英語ではなく「やさしい日本語」でよい」ことは目からウロコ。海外のお客様対応=英語化することと思込み、悩んでいたハードルがぐっと下がったように思う。お客様と接する機会の多い年配の解説員は、英語ができないからと案内を戻込みしたりすることもあったが、「やさしい日本語」なら私にもできるような気がする、と前向きになれる。「やさしい日本語」の取り組みは、高齢者、障がい者などの対応にもなっていること。時と場合によって、使い分け、全ての人が接する掲示、最初のキャプションには「やさしい日本語」を使うことを考えていきたい。

③ 村田先生の講義で一番印象に残ったことは日本に住む外国の方が急激に増えていて情報弱者になっている

こと、それを「やさしい日本語」でかなりの部分を解決できることです。具体的な「やさしい日本語」のポイントがとても分かりやすく明日からでも使えそうな気になりました。水族館は老若男女様々な方に生きものの魅力を伝えるためにあると考え、その対象になる方に合わせて伝える方法を工夫するなど実践してきましたが、外国の方や在留外国人の方を意識したことは少なかったように思います。そのことに気づいたこと、その方々に伝える具体的な方法を聞いたことが大きな収穫でした。

質問2

今回の研修会で、佐々木先生の講義から学んだことは何ですか？

① やさしい日本語のほかに普通の日本語・難しい日本語の使い分けについての言葉は、学芸員にとっては考えさせられた。自分たちの常識を伝えようとするのではなく、観る側がどのくらいの理解度で展示を見るのかという視点を持って説明を作り上げることが必要であると感じた。様々なことに取り組む際、学芸員一人で突っ走るのはなく、組織全体で問題を共有できるよう、組織内外の誰でも理解できるように、情報を整理して発信していくべきであると思った。

② 資料館の情報を誰に、何を伝えるか、その目的をはっきりさせる必要性を学びました。キャプションや解説パネルでは定義・意味がはっきりしている専門用語を使いがちですが、それは作り手の都合であって、はたして一般の方々はどこまで内容を理解し、興味を持って読んでくれるのか…? 独りよがりの文章にするのではなく、その対象によってやさしい、ふつう、むずかしい日本語の使い分けを意識して行っていきたいと思っています。

質問3

今回の研修会で、高尾先生の講義から学んだことは何ですか？

① 従来のやり方の継続のみではなく、環境や時代の変化によって、それにあった取り組み、チャレンジする必要性を学びました。そこには資料館の存在意義、社会課題の解決のために何ができるのか、広い視野に立ち、そして志も高いものでは無ければ駄目と思いました。自分の館だけで完結させてこじんまりと物事を済ますのではなく、他館や外部の人々との交流を広げ、より魅力的な館にしていきたいと思っています。

② 多摩六都科学館は、近くに家族が住んでいることもあり存在は知っていたのですが、恥ずかしながらご紹介のあつ

たような先進的な調査や事例を行っていることを今回初めて知りました。対話型鑑賞とやさしい日本語を取り入れたプラネタリウムの解説は、着眼点や活用法がとても興味深く、ぜひ自身も体験してみたいと思いました。

質問4

午後のワークショップでは、鹿児島国際大学ミュージアムの4つの資料を「やさしい日本語」にしました。自分の班で作成した資料のキャプションや他の班のキャプションについて、3人の講師からいただいたコメントで、今後は注意したいと思ったことをお書きください。

① キャプションを作る側は、伝えたい情報をたくさん持っていて、できれば全部伝えたいと考えてしまう中で、情報を絞ることも大切なことであり、同時に難しいことであるのを学びました。また、同じ資料を扱っても、各班でどのような視点に重点を置くかによって、キャプション内容が全く異なることが分かりました。資料ひとつで複数の説明が作れるということは、展示でのコンセプトの揺れにもつながるのではないかと思ったので、文章を作る際には、自分が伝えたいことを明確にし、その点に注意して、きちんと表現できるような言葉選びをしていきたいと思いました。

② キャプション等は、単に簡単な言葉に変えるだけでなく、誰に対して、何を知ってほしいのかというところを突き詰めていかないと、やさしい日本語にはならないという点。様々な班の発表を聞いていると、簡単な言い換えの基準が個人によってバラバラであると感じた。一人で作るのではなく、複数の目で確認しあって、必要かどうかを判断する可能性があると感じた。

質問5

今回の研修会に参加してよかったと思うことをお書きください。

① やさしい日本語と多文化共生について、その背景と必要性について学ぶことができました。研修を受けている最中から、研修内容を参考に、自館ではこうしたい、こう変えられる、ということに気づくことができました。なによりも、もっとがんばろうというやる気につながった、とても有意義な研修でした。

② やさしい日本語で表現するための技術だけでなく、現在の博物館の役割や地域作りのためのハブとして、他団体と協力してプロジェクトを推進すること等を学べてよかった。



オンライン講義風景(村田先生)



講義風景(高尾先生)



グループワーク

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

⑧ 「展示制作」

■ テーマ

「テーマは決まり、作品リストも固まったけれど、さあこれらをどう展示しようか？」と毎回思案する学芸員も多いと思います。今回は諫早市美術・歴史館の展示会を事例に、「展示会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館特任教授)

■ 開催日時

2020年9月23日(水)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

諫早市美術・歴史館(長崎県諫早市東小路町2-33)

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示制作」の悩みの共有 10:30 報告「展示会の作り方-諫早市美術・歴史館を事例として-」 11:10 生誕110周年記念「廣津雲仙」会場見学 12:00 昼食 12:50 グループワーク①「展示制作のココはいいなあ【I like】、ココはこうしたいなあ【I wish】というポイントを検証する」 13:40 グループ発表 14:20 講義「展示会の作り方」で留意したいこと(洪恒夫先生) 15:20 休憩 15:35 グループワーク②「もう一度展示会を見てみよう」 16:15 グループワーク③「講義・グループワークを通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 16:40 ふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

20名(長崎14名、福岡3名、大分1名、東京2名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか？

①「展示=おもてなし」である。来館者にホスピタリティを提供し、見る側に驚き・発見・共感・納得を与えられることがよい展示であり、展示が効果的に見る側に作用するプロセスでもあるということ学びました。

②今までは新しい展示を行う前に「何をしたいか」というところから入り、それを実現するためには「何をしなければいけないか」について話し合い、展示を作り上げていた。この進め方があっているのか、展示を作り上げるまでの時間は適当なのかなど不安もありながら行っていた。今回の研修会で、洪先生から新しい展示を作るためにはコンセプトを作り上げることに時間をかけた方がよいとのことでした。作り上げたコンセプトがしっかりしていればその後、何があってもブレないで作業を進められると聞き、今まではコンセプトがフワッとしていたなと感じた。今後は、コンセプトをしっかりと作り上げ、館全体に周知することでまとまりのある展示を作ればと感じました。

③フィロソフィーと、ベネフィット&ターゲット、スペックの関係性と館や展示会の在り方について、ほんやりと分かっていたものの、改めて認識することにより、館の使命を再確認することができました。また、洪先生がこれまで手掛けてこられたプロジェクトのノートを見せていただきましたが、あらゆることを一冊の記録にまとめてあり、関係者とのやり取りなどもそのノートを見れば全て完結するよう工夫してあったので、今後、その方法

を取り入れたいと思います。

④「展示することは、もてなすこと」。フィロソフィー→ベネフィット→スペックなど、展示制作において心に留めておかなければならない核となる知識を学ばせていただきました。佐賀県立博物館の特別展の構成について説明をいただき、引き込まれるようなデザインや展示方法を拝見し、以前の展示室とは別空間であるような印象を受けました。意味のあるデザイン、楽しませるデザインは、私たちの知的好奇心を満たし、魅力的な展示になるのだと実感いたしました。

質問2

今後展示会を企画するに当たり、諫早市美術・歴史館の企画展「生誕110周年記念 廣津雲仙展」を事例にしたワークショップ、洪先生のゼミナールの学びから活かしてみたいことは何ですか？

①単なる資料の展示ではなく、お客様目線に立った展示会場づくり、見る人が「自分ごと」として参加できるような仕掛けづくりを取り入れていきたいです。

②「I like」「I wish」「質問」という3つの視点で物事を見て考えること。何かをする際、この視点で考えると気づきや発見があり、次につながれると思いました。

③一人の作家に迫る展示内容の中で、書の作品だけではなく作家が使用していた筆などの資料を併せて展示する構成は良いと思いました。洪先生の講評で出た、作家が資料を使用していた際の写真などを入れることで、展示内にレイヤーを作り、より作家の人間性へアプローチできるような手法になるという指摘は、意識して活かしていきたいと思います。また観客のターゲットについて、万人から満点を貰える展示は無く、何かご意見をいただいた際は展示コンセプトに関して、胸を張って言うようにしておくことは意識していきたいと思いました。

④コロナ禍で大変な状況ではありますが、今の時期だからこそできることがあるということ学びました。ネットワーク作りをすることで、今後の活動の領域を広げていきたいです。また、来館者のニーズを的確につかんだ動線づくり、ニーズを踏まえて自分たちがどのようにしたら良い展示になるかを考えていきたいです。また資料に負荷をかけないように、資料と相談しながら展示することをこころがけたいと思います。

質問3

今後、他の博物館、図書館などの展示会、展示を見学する時に、どんなところに注目したいと思いますか？

①展示のコンセプトや展示会場のアイキャッチがどんなものか、どのような効果があるのかを注目して見てみたいです。

②これまでは他館を観覧する際に資料自体の魅力や展示技術の面に注目していましたが、今後は展示の章立てや導線、空間デザインなどにも注目して、展示担当者の立てたコンセプトを推察しながら観覧したいと思います。

③展示の方法や照明・キャプションなどにも注目しつつ、ひとつひとつこだわって作られたデザイン、レイアウトや空間全体をみて、展示のねらいや制作者の見てほしい箇所や意図を少しでも感じられたらと思っています。心を揺さぶられた体験を大切に、考察しながら次に繋げていきたいです。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

①お客様を「もてなす」という視点で、これまでの展示作りができていたかどうかを省みる機会となりました。今後は、お客様に何を伝えたいのか、どんな便益を提供できるのかをしっかりと考えて企画作りを行おうと思いました。

②新しい展示、企画展を作るときに、今までは何となく「これがしたい」と言う事で進めてきていました。それでは展示が出来上がるまでにいろいろとブレしてしまうので、最初の段階から『コンセプトを明確にすること』が大切だと言う事を教えて頂き、今後の展示制作に生かせる研修になりました。

③現在のコロナ禍で、どの館もそれぞれに悩みなどがあると思いますが、正解というものではなく、その都度考えて対応するしかない、ということをお伝えいただきました。また、今だからこそできるネットワークづくりなどの時間に当たるチャンスの時期だということをお伝えただけで、前向きにチャレンジすることの重要性を改めて実感できたので良かったです。また、他の館の方々の意見交換をすることができ、自分とは違った視点や他の施設での工夫などを知ることができて良かったです。また機会がありましたら、ぜひ参加させていただきたいです。どうも有難うございました。



講義風景 (洪先生)



講義風景 (洪先生)

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/セラピーコース)
[連続講座]

「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

① 「庭園・美術館 de 園芸療法」

■ 講師

岩崎 寛 (千葉大学大学院園芸学研究科准教授)
専門分野: 環境健康学

■ 講師から一言

園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や、落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法についてお話しします。

■ 開催日時

2020年9月21日(月・祝) 10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

飯塚歴史資料館・旧伊藤伝右衛門邸
(福岡県飯塚市柏の森 959-1・飯塚市幸袋300)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」 11:50 昼食 12:50 名勝「旧伊藤傳右エ門氏庭園」見学前の心理・生理測定 13:00 「旧伊藤伝右衛門邸」にバス移動 13:30 園芸療法プログラム1 名勝「旧伊藤傳右エ門氏庭園・屋敷」散策 15:00 庭園見学後の心理・生理測定 15:20 飯塚市歴史資料館へバス移動・休憩 15:50 園芸療法プログラム2 色々な豆を使ったタオルハンガーづくり 16:30 ふりかえり、質疑応答 17:00 終了

■ 受講者数

16名(福岡14名、熊本1名、千葉1名)

■ 事後アンケート

質問1

岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

*植物とのかかわりのなかで、個人レベルで実は知っている・すでに体感していることを、岩崎先生がエビデンスをもとにわかりやすい解説で園芸療法の世界へと導いてくださいました。「園芸療法の主役は植物でなく人」であるから、人についての学びが大切とおっしゃっていたことが印象的でした。数々の実験内容がそのことを物語っているなと感じました。また、園芸療法の歴史を通じて、各国のこの分野の現在をのぞき知ることができました。医療福祉への植物・緑の活用は、地球規模でこれからはますます必要とされる世情にあるなか、心から園

芸療法の活用と理解が広がることを願うばかりです。

質問2

ワークショップ「豆ハンガーづくり」を通して、気づいた事をお書きください。

*とても楽しく、また見た目もおしゃれで、万人に受けそうな感じがとても「上手い」ワークショップだなと思いました。園芸療法の入門として考えると、気軽に参加でき、見本に近いクオリティに誰でも仕上げられる「豆ハンガー作り」は最適だと思います。豆の種類の種類にもなり、使っている材料は同じでも選び方によって個性が出て、比べて見ても面白かったです。

質問3

岩崎先生と一緒に旧伊藤邸の庭園散策した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。

*今まで何となく「綺麗な庭」としか捉えていなかった庭園も、先生のお話を聞きながら見ると、常に見られていることを意識した造りであることが分かりました。特に「木にも裏表がある」という話が興味深かったです。庭の造りや植物たちを丁寧にみると、作り手の意図も感じ取ることが出来、庭園散策にはこういった楽しみがあるんだなと思いました。

質問4

園芸療法を学んだことで、日常生活で起こっている変化をお書きください。

*職場の庭掃除や家の庭掃除が楽しくなりました。園芸に取り組む動機づけの仕方次第で、楽しめるものだと発見できたのはよかったです。園芸が全ての人に対して取り組みやすいものだと分かったのもよかったです。料理とそうでないものがあるように、絵画や彫刻も置く環境によって美しさが変わってくるかもしれない。



庭園散策

② 「動物園 de アニマル・セラピー」

■ 講師

山本 真理子 (帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科講師)

専門分野: 介在動物学

■ 講師から一言

動物は医療、福祉、教育など様々な場面で人々の生活を豊かにしてくれています。一般にアニマル・セラピーとよばれており、今もなお発展し続けている分野です。アニマル・セラピーとは何か、動物からもたらされる効果のメカニズムに触れながら、動物園での応用について共に考えていきたいと思っています。

■ 開催日時

2020年9月26日(土) 10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

大牟田市動物園 (福岡県大牟田市昭和町163)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 講義「大牟田市動物園が進める動物福祉の取り組み」(椎原園長) 11:00 測定に関する事前説明、ふれあい体験前の心理・生理測定 11:30 「モルモットのふれあい体験」 11:50 ふれあい体験後の心理・生理測定 12:20 昼食 13:10 講義「アニマル・セラピーとは?」(山本先生) 14:40 質疑応答(講義を振り返り、先生に質問する) 14:50 休憩 15:00 園内で行うグループ活動の確認 15:10 園内観察活動(グループ単位で移動) 16:00 園内観察活動後の心理・生理測定 16:10 休憩 16:15 動物園資源を活かした、五感を刺激するプログラムを考える(グループ討議) 16:35 発表会 16:50 山本先生講評 17:00 終了

■ 受講者数

17名(福岡16名、山梨1名)

■ 事後アンケート

質問1

椎原園長が目指す大牟田市動物園のミッションで刺激されたこと、そしてモルモットのふれあい体験を通して、気づいた事をお書きください。

*「動物園で考える・動物と人の福祉」がテーマである。動物は人と同じ、苦しみも痛みも感じる、感情もある。また自分で考えて行動する。動物が主体であり、動物の個の視点、立場から考える。というお話であった。モルモットに少し触った。あたたかかった。しかし、すぐ隠れ家に逃げた。逃げ場があり良かったと思った。園長の

目指す動物園のミッションで刺激を受けたのは、動物に協力してもらうことで、動物の心身に負担なく健康管理などを行うトレーニングを続けていることである(ハズバンドリートレーニング)。そして、必要な行動ができる環境の提供・エンリッチメントである。

質問2

山本先生の講義で、アニマル・セラピーの理論、そして先生の研究などから興味深かったことをお書きください。
*動物との関わりが高齢者にもたらす効果として、健康寿命の延伸と生活の質の向上が挙げられているところです。動物がもたらす効果として、私は、癒して心が満たされ、精神的な支えになるというイメージしかありませんでした。しかし、散歩することで運動量が増えたり、会話が生まれることで社会との関わりが増えたりするといった物理的な要素もアニマルセラピーに関わりがあると知り驚きました。

質問3

大牟田市動物園を散策して、「何に」心が動かされましたか?そして、仲間の「感動」も踏まえ、こんなプログラムを利用者に提供したいというアイデアをお書きください。
*セミの鳴き声。風の音。子供連れ家族。ほのぼのとした感じが素敵でした。また、駆除された動物を餌として与えている。廃棄処分ではなく、命を紡いでいる。餌として与えるまでが、大変とは思いますが、続けていただければと考えています。研修の際、発表された、肉球を使つてのスタンプ、大きさも形もいろいろ、いろいろな物に押せるようにすれば楽しい。さらに、アニマル柄の服を着て来園した方へのサービス。これも楽しそうですので、提案したいと思います。



モルモットのふれあい体験

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/セラピーコース)
[連続講座]

「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

③ 「歴史資料館 de 回想法」

■ 講師

市橋 芳則 (北名古屋市歴史民俗資料館長)
専門分野: 博物館学

■ 講師から一言

回想法は、地域に暮らす高齢者を元気にしていくプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康推進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい(回想法)事業」を2002年から実践しています。私たちは、これを「博福連携」と名付け、活動の軸の一つとしています。

■ 開催日時

2020年10月3日(土)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

飯塚歴史資料館(福岡県飯塚市柏の森959-1)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 心理・生理測定(1回目) 10:40 休憩 10:45 (途中、概ね40分ごとに5分休憩) 講義「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」 12:45 昼食 13:45 見学方法の説明 13:50 展示室(2階)へ移動・見学(個人鑑賞) 展示室内を見学し、何か刺激を受けた作品を探してみる 14:15 心理・生理測定(2回目) 14:30 休憩 14:40 刺激を受けた作品を紹介し合う(グループ討議) 15:00 展示室へ移動(2階)・見学/刺激を受けた作品について、お互いの回想を交換する(グループ鑑賞) 15:45 心理・生理測定(3回目) 16:00 休憩 16:10 博物館資源を活かした、五感を刺激する回想法プログラムを考える(グループ討議) 16:30 発表会 16:50 市橋先生講評 17:00 終了

■ 受講者数

17名(福岡15名、長崎1名、愛知1名)

■ 事後アンケート

質問1

市橋先生の講義で、地域回想法の理論、先生の実践などから興味深かったことをお書きください。

*北名古屋市歴史民俗資料館=昭和日常博物館のみでなく、回想法センターがあり、市をあげての取り組みであることに、興味を持ちました。運動や通院ではなく、心が豊かになることにより健康になれると感じました。また、資料収集の予算がゼロでも、様々なやり方があるというマネジメントについて、さらに詳しく知りたいと感じました。

*回想法は、過去を思い出して語り合い、心を豊かにするだけでなく、人とのコミュニケーションも広がっていくことが分かりました。特に、回想法スクールのグループ回想法では、スクールが終わった後も人との繋がりが続いていき、一人一人の健康観の高まりがあるというお話がとても素敵で、印象に残っています。

*平成時代の回想法の材料の準備も進んでいることに驚いた。昭和時代の回想法の材料(戦前編)は、当時を知る人がいなくなると伝えられなくなる。伝えられる人がいるうちに、資料とその使用法などを保存しておかなければ取り返しがつかなくなるといった。

質問2

飯塚市歴史資料館を散策して、「何に」心が動かされましたか?そして、仲間の「感動」も踏まえ、こんなプログラムを利用者に提供したいというアイデアをお書きください。

*民具展示スペースの「唐箕」にもっとも心を動かされた。20年ほど前まで実家倉庫に唐箕があった。当時は農機具だと知らずに、石や団栗を入れて取っ手を回して遊んでいたことを思い出し、自分以外にもこのような経験をしたことがある人はいるのかどうか非常に気になった。他班の発表を聞いたところ、鑑賞によって得られる感動は、その人の年齢や経験、感性によって様々であるといった点を利用したプログラムが多く提案されていた。そこで、唐箕をはじめとした農機具の用途を伏せて展示し、鑑賞者に実際の使用手順を実演してもらい、といったプログラムを組むと面白いのではないかと考えた。

*炭鉱のコーナーに心が動かされました。炭鉱について何となく知っているぐらいだったため、飯塚歴史資料館で、道具や石炭の実物や説明をみて、重労働であったかを改めて感じました。



展示室見学

④ 「美術館 de 音楽療法」

■ 講師

井上 幸一 (福岡女子短期大学音楽科准教授)
専門分野: 音楽学/音楽療法

■ 講師から一言

音楽療法は、介護予防や健康増進を含む心身機能の維持・改善、行動の変容などを目的として、高齢者をはじめ幅広い対象に実践されています。美術作品によるイメージを基に、楽器を用いて「音・音楽に包まれる空間」を作り、その響きを共有するミュージック・アクティビティの体験を行いたいと考えています。

■ 開催日時

2020年10月10日(土)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学美術館(福岡県福岡市東区松香台2-3-1)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:10 講義(楽器の説明・体験活動内容の説明を含む) 11:00 実験の目的及び方法・個人情報保護等の説明 11:15 グループ分け 11:30 昼食 12:30 体験活動の流れの確認 12:40 測定1(アミラーゼ・血圧・脈拍・VASシート) 13:10 展示室へ移動、個人鑑賞 14:00 教室へ移動、測定2(アミラーゼ・血圧・脈拍・VASシート) 14:15 絵画を決め、イメージを共有する 14:25 表現方法、使用楽器、演奏する場所を決める 14:40 展示室へ移動、準備と練習 15:20 発表 15:50 教室へ移動、測定3(アミラーゼ・血圧・脈拍・VASシート) 16:20 休憩 16:30 振り返りとまとめ 17:00 終了

■ 受講者数

20名(福岡18名、山口1名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

井上先生の講義で、音楽療法の理論、そして先生の実践などから興味深かったことをお書きください。

*美術館における音楽療法の実践手段として、鑑賞者に音楽を聞かせることでなく鑑賞者自身による音楽表現行為を体験させるという点。受講以前のイメージとして、あらかじめ用意された音楽を絵画の前で聞くことが音楽療法なのではないかという思い込みがあったため、美術館内での演奏行為を鑑賞に取り入れるというのは新鮮であった。美術と同様に音楽ももっと親しみやすいものであるべきで、積極的にそういった視点を取り入れていく努力をこれからしていきたい。

質問2

美術館での「鑑賞とセッション」について、あなたの中で起こった変化(個人とグループの鑑賞方法での気づきなど)、仲間とともに過ごした時間(音を探る語り合いや即興演奏、言語的・日言語的コミュニケーションなど)について、感想をお書きください。

*個人展示鑑賞では、物語が思い描きやすいものやそうでないものがありました。今回、物語をイメージしやすい展示で音楽を作りましたが、今度もしやる機会があれば、物語がイメージしやすい抽象画を選んで音楽を作ってみたいと思いました。再度グループで鑑賞してみると、今まで気づけなかったものが見えてきました。例えば、「放牧:馬三題より」では、馬がパステルカラーで描かれていて、かわいらしい絵なのに、手前の馬がギロツと睨んでて起こって見えることに気づかされ、イメージがだいぶ変わりました。選んだ展示から物語を考え、イメージした音を探すことは楽しかったです。自分たちのイメージを音楽にすることは、楽譜の音楽より、自由でより音を楽しめたと思いました。

質問3

音楽療法を学んだことで、日常生活での「あなたと音の関わり」の変化をお書きください。

*日常生活で音を感じる中で、今聴こえている音は他の人にはどんな風に聴こえていて、どんな印象を持っているんだろうと興味がわいてくるようになりました。
*過去に吹奏楽部に所属していた経験があるため元々演奏に興味があったが、講座で楽器を触ってからはその気持ちが強くなり、家でも演奏できる楽器を購入しようか検討している。



楽器選定

ミュージアム・カフェ事業

文化芸術推進基本計画(第1期)(文化庁平成30年3月6日)第1「我が国の文化芸術政策を取り巻く状況等」の2「昨今の我が国の文化芸術を取り巻く状況変化」で、「美術館、博物館図書館等では、文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、ボランティア活動や観光等の拠点など幅広い役割を有している。また、教育機関・福祉機関・医療機関との関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」という提言をもとに、本事業では高齢者等を対象とした「博物館健康ステーション」構築という地方博物館の新たな機能を付加できると期待する「ミュージアムカフェ事業」を展開していくため、福岡県内の歴史、民俗、考古、美術系の博物館などを5回に渡って巡りながら、その可能性や課題を考える機会としました。合わせて、生化学的・生理学的な方法からストレス反応を測定することにより、ミュージアムカフェのリラックス効果を科学的に実証する機会としました。

- ① 開催場所: 行橋市増田美術館、
行橋市歴史資料館
参加者: 10名
開催日時: 2020年12月13日(日)



【展示解説】

- ② 開催場所: 大野城市心のふるさと館、
九州歴史資料館
参加者: 16名
開催日時: 2020年12月20日(日)



【グループ鑑賞】

- ③ 開催場所: 久留米市美術館、
太宰府市文化ふれあい館
参加者: 12名
開催日時: 2021年1月23日(土)



【展示解説】

- ④ 開催場所: 福岡市美術館、
福岡市埋蔵文化財センター
参加者: 11名
開催日時: 2021年1月24日(日)



【木器貯蔵施設見学】

- ⑤ 開催場所: 九州鉄道記念館、
旧門司三井倶楽部など門司港レトロ地区
参加者: 16名
開催日時: 2021年1月30日(土)



【集合写真】

多言語学習教材開発事業

博物館が有する作品・資料を「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術(教育普及)」「(以下、4つの技術)の継承・発信を促進するための学習教材を作成しました。その方法として、地域・観光振興を含め、様々な対象に向けた「いつでも、どこでも受講可能な」オンライン学習教材(今回は着物の取扱い方)となるように努めました。

今回の活動は以下のとおりです。本事業の学芸員技術研修会に参加した博物館等の学芸員に相談しながら、着物資料を多く所蔵する佐賀県博物館・美術館の学芸員の協力、交流から、学習教材の内容やその発信、そして効果評価の方法について検討材料を明確にし、学習教材制作会社との打ち合わせ(絵コンテ、原稿などの作成準備)および撮影を進め、学芸道シリーズ「着物の取り扱い方」を完成させました。



撮影風景①



撮影風景②

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める 米国・英国博物館との交流事業

昨年度の交流事業の様子



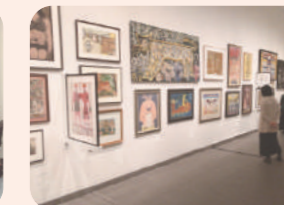
プログラム Met Escapesの様子



ホイットニー美術館 インタビューの様子



イントレピッド海上航空宇宙博物館
インタビューの様子



アメリカンフォークアートミュージアム

***新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため、現地調査中止**



ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー



ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー
インタビューの様子



国立スコットランド博物館



ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー
インタビューの様子



米国・英国博物館関係者を招聘した 国際シンポジウム事業

今回は、新型コロナウイルス感染拡大のため、海外からの博物館関係者の招聘や参加者の国内移動が困難となったため、2021年2月13日(土)、20日(土)の2日に分けたオンライン開催とした。



令和2年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」

2021 九州産業大学国際シンポジウム 博物館と医療・福祉のよりよい関係 ～日本・英国・米国をつなぐオンライン開催～

新型コロナウイルスの感染拡大が続く今、ユネスコとICOM(国際博物館会議)の調査によると、世界の約9万5千の博物館のうち、13%が永久に閉館する恐れがあるという。また、平成30年度に行った文部科学省の「社会教育調査」では、国民は年間「1.1回」しか博物館を利用しないという。全国に5,700館余りある博物館は、今後どうなっていくのだろうか?地域社会で、どんな役割を果たしていけばよいのだろうか?私たちは、この2年間、「地域社会での博物館の役割」「博物館と医療・福祉機関とのよりよい関係」をテーマに、国際シンポジウムを開催してきた。今回のシンポジウムは、「コロナ禍での博物館活動」、そして「博物館と高齢者の健康、幸福感」をテーマに開催する。

我が国は、団塊世代が75才以上となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれる。博物館と福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して、様々な社会的課題を解決する方策研究を、日本、英国、米国の博物館関係者、そして参加者と一緒に考えていきたい。 *2025年:団塊の世代(1947-49年生)が75歳を超え、5人に1人が後期高齢者という超高齢化社会になる。

オンライン開催 (Zoomを使用)

●2021.2.13 SAT ●2.20 SAT 日本時間 20:00 ~ 22:30

同時通訳あり

受講料 無料

※要事前申込 (お申し込みは裏面をご覧ください)
主 催:「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会(九州産業大学美術館<代表>、海の中道海洋生態科学館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、田川市石炭・歴史博物館、唐方谷尾美術館)、九州産業大学

KU 九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University

KU 九州産業大学
Kyushu Sangyo University

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

■ タイトル

2021九州産業大学国際シンポジウム
「博物館と医療・福祉のよりよい関係」

■ 開催趣旨

新型コロナウイルスの感染拡大が続く今、ユネスコとICOM(国際博物館会議)の2020年5月発表の調査結果によると、世界の約9万5千の博物館のうち、13%が永久に閉館する恐れがあります。また、2018年度に行った文部科学省の「社会教育調査」では、国民は年間「1.1回」しか博物館を利用しません。

全国に5,700館余りある博物館は、今後どうなっていくのでしょうか?そして、地域社会で、博物館はどんな役割を果たしていけばよいのでしょうか?

私たちは、この2年間、「地域社会での博物館の役割」「博物館と医療・福祉機関とのよりよい関係」をテーマに、国際シンポジウムを開催してきました。

今回のシンポジウムは、「コロナ禍での博物館活動」、そして「博物館と高齢者の健康(Health)、幸福感(Wellbeing)」をテーマに開催します。

我が国は、団塊世代が75才以上となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれます。

withコロナ、afterコロナに向けて、博物館と福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して、さまざまな社会的課題を解決する方策研究を、日本、英国、米国の博物館関係者、そして参加者と一緒に考えていきたいと思ひます。

■ 開催日時

1回目/2021年2月13日(土) 20:00~22:30(オンライン開催)

2回目/2021年2月20日(土) 20:00~22:30(オンライン開催)

*英国現地時間/両日共 11:00~13:30

*米国現地時間/両日共 6:00~8:30

■ オンライン調整会場

九州産業大学総合情報基盤センター(福岡県福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階)

■ 開催方法

① ZOOMによるオンラインにて、日本、英国、米国を同時中継して行う。

② (株)サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

■ 参加者数

70名(オンラインによる申込、先着順)

■ 参加者の国際シンポジウムへの期待の声(抜粋)

① シンポジウムを通じて日米英の博物館がコロナ禍の中でいかに活動を継続しているのか、そして、アフターコロナ時代への展望を勉強させていただき存じます。

② コロナ禍における他館での博物館運営方法を共有するとともにそれらを踏まえて当館の今後の展望についても見つけ直す機会にできればと考えております。

③ Withコロナの中、各館、各方面はどのように乗り越えようとしているのか、様々な実践報告等を聴かせていただき、当館にも活かさせていただきたい。

④ 今年度は海外調査等が行えませんでしたので、海外事例について直接報告を聞ける貴重な機会を楽しみにしております。

⑤ 日々、博物館や科学館の展示空間を制作しており、様々な方に居心地の良い場を享受できるよう、追求しております。コロナ禍の中で今、館に何が求められているか、現場の声や、他国の状況を知りたいと思ひます。

11-1



1月29日通信テスト①



1月29日通信テスト②

米国・英国博物館関係者等を招聘した
国際シンポジウム事業

開催内容

* 1回目のテーマ *

「withコロナにおいて、どのような感染対策をして、博物館活動を継続していませんか? (現況報告)」

【司会】吉田公子(九州産業大学美術館准教授) 20:00 開会
開会挨拶 20:05 事例報告1「コロナ禍における福岡市美術館の試み」福岡市美術館/鬼本佳代子 事例報告2「コロナ禍における北九州市立自然史・歴史博物館の感染対策と博物館活動」北九州市立自然史・歴史博物館/御前明洋 20:35 事例報告3「新型コロナウイルス(COVID-19)感染症に対する水族館での感染拡大防止策について」海の中道海洋生態科学館/塚田仁次 20:35 事例報告4「コロナ禍の英国・ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの活動」ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / ジェーン・フィンドレー 21:05 事例報告5「コロナ禍の米国・Arts & Mindsの活動」Arts & Minds/キャロリン・ハルピン・ヒーリー 21:20 休憩 21:40 質疑応答/モデレーター:緒方泉(九州産業大学地域共創学部) 22:30 終了

* 2回目のテーマ *

「withコロナ、afterコロナに向けた高齢者プログラムの取り組みと課題」

【司会】吉田公子(九州産業大学美術館准教授) 20:00 開会
挨拶 20:05 事例報告1「[博物館]で、リラックス効果がある? -心理・生理測定法の開発-」九州産業大学/緒方泉 20:30 事例報告2「世界的パンデミック下で高齢者層に働きかける -ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの取り組み-」ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / ジェーン・フィンドレー 20:55 事例報告3「withコロナ、afterコロナに向けた高齢者プログラムの取り組みと課題」Arts & Minds/キャロリン・ハルピン・ヒーリー 21:20 休憩 21:40 質疑応答/モデレーター:緒方泉(九州産業大学地域共創学部) 22:30 終了

1回目の発表要旨

「コロナ禍における福岡市美術館の試み」

2020年2月20日に福岡で最初の新型コロナウイルス感染症罹患者が発生して、1年が過ぎようとしている。その間、発表者の所属する福岡市美術館も例にもれず、2月27日より断続的に、計2か月ほど休館し、現在も展示室でのギャラリートัวร์を休止したり、講座などについては人数制限を設けて実施したりしている。その中で、大きな役割を担ったのが、おそらく他館も同様であろうが、オンライン上での活動である。本発表では、福岡市美術館のオンライン上での3つの試みについて述べたい。まず、一つ目の試みは、既存のブログ、SNSを利用した「オンライン大作戦!」である。3月の休館を期に、最初にブログ上で、こどもたちに向けてぬりえのダウンロードができるようにしたのがきっかけであった。その後、ブログはもちろん、FacebookやInstagram、YouTubeを使い、所蔵品紹介、展覧会紹介、アーティストによる工作動画の紹介、さらには美術館の裏側紹介などを始めた。なお現在は、定期的な更新はしているが、開館しているため、展覧会の様子などを発信している。そして2つ目が、夏休みこども美術館2020の関連プログラムとして行ったオンラインギャラリートーク「オンラインでみるみる怖い絵の世界」である。毎夏開催しているこのこども向けの企画では、通常なら、期間中にボランティアが展示室でこども向けのギャラリートークを行う。しかし、2020年はそれがかなわないため、Zoomを使って実施したのだ。そして、3つ目が、11月に実施したオンラインワークショップ「羽ばたく!色とり鳥」だ。これは、毎年11月3日の開館記念日とその前後の週末に行っているファミリー DAYの一環として実施した。発表では、画像でこれらの活動を紹介するとともに、オンライン上における教育活動の可能性などのプラスの面に加え、課題についても述べる予定である。

鬼本 佳代子(福岡市美術館)

1回目の発表要旨

「コロナ禍における北九州市立自然史・歴史博物館の感染対策と博物館活動」

北九州市立自然史・歴史博物館は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により2020年2月28日から合計104日間臨時休館することとなった。当館では再開に向け、5つの班(全般対策班、イベント班、入館調整班、渉外担当班、展示・情報発信班)を編成し全職員がいずれかの班に所属して、課題の整理や対策の検討・実施を行った。対策は国や日本博物館協会等のガイドラインを参考に、「3つの密(密閉、密集、密接)」の発生を防ぐことを基本方針とし、状況に応じ随時変更していくことを念頭に実施した。また、対策に関して医師のアドバイスを受けたほか、取り組みの一部に文化庁芸術振興費補助金も活用した。

具体的な対策として、密の発生を抑えるのが難しい展示室等の閉鎖、ハンズオン展示等の使用中止、サーモグラフィーや記名所の設置、透明シートの設置、空調の改修、清掃回数の増加、手すり等の消毒などを行った。また、来館者には館内の一方通行や、ソーシャルディスタンスの確保、手指消毒、検温、マスクの着用などへの協力依頼を行った。さらに、イベントや講座等に関しては、8月までは中止し、9月以降、人数や用具の消毒などに関する実施基準を設けて再開した。8月からは、予約システムの導入も行った。館内の面積を元に、来館者同士が2m間隔を保つことのできる人数を計算し、1時間当たりの予約可能人数を設定した。博物館のホームページやSNSでは、臨時休館や平日のみの開館、入場制限等の影響で来館できない方のため、各学芸員が博物館での活動や展示、研究分野等に関する動画を作成し随時公開を行っている。

感染対策を実施した上で、今のところ特に混乱もなく開館することができている。今後、特別展開催時における入館可能人数や券種の変化にも柔軟に対応できる来館者の利便性の高い仕組みの構築などを検討する必要がある。

御前 明洋(北九州市立自然史・歴史博物館)



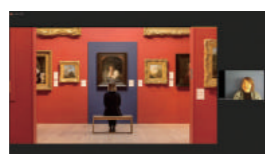
① 鬼本氏発表



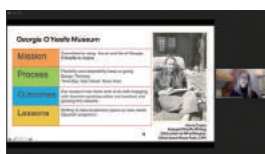
② 御前氏発表



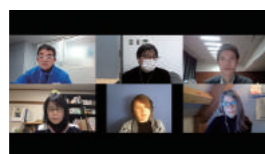
③ 塚田氏発表



④ ジェーン氏発表



⑤ キャロリン氏発表



⑥ 討論風景



⑦ オンライン調整会場全景



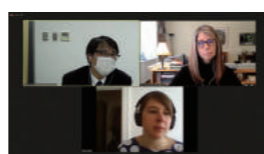
① 緒方氏発表



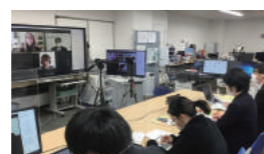
② ジェーン氏発表



③ キャロリン氏発表



④ 討論風景



⑤ オンライン調整会場全景

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

1回目の発表要旨

「新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症に対する水族館での感染拡大防止策について」

2020年1月に初めて日本で感染が報告された新型コロナウイルス (以下COVID-19) の影響で、(公社) 日本動物園水族館協会に所属する143園館 (動物園91園館、水族館52園館) のうち2020年4月21日時点で138園館 (96.5%) が休館した、マリンワールド海の中道 (以下当館) は日本政府から感染拡大地域の7都府県に発令された緊急事態宣言により4月8日から5月19日までの42日間営業を停止した (福岡県の緊急事態宣言解除は5月14日)。

当館が位置する福岡県福岡市では2020年2月20日にCOVID-19の感染者が初確認され、3月中旬から感染者が増加した。当館では感染拡大防止対策として、2月下旬から入館者が集まる屋内イベント、移動を伴う出張、実習生の受け入れ中止などの対応を行いながら営業は継続していた。福岡県内での感染者数増加に伴い入館者は2月から漸減し、3月には前年比51.1%までに減少した。福岡県への緊急事態宣言解除後に営業を再開し、来館していただける方はいたが、団体での利用は皆無になり、一年間で一番の繁忙期である8月は前年比48.4%まで落ち込んだ。

当館では福岡市でCOVID-19が確認されてから休館中も展示生物の管理のために職員は出社したが、必要最低限の出社人数に制限、出社時の検温、マスクの着用、手洗い、うがいの励行など職員同士の感染防止策、営業を再開してからは入館者同士の感染を防止するために入館前のサーモセンサーによる検温、マスクの着用、館内各所での手指消毒、一定の距離を空けての観覧等の対策を感染状況に応じて実施した。

今回は福岡県でCOVID-19が確認されてから、2020年12月末までに当館が行った感染拡大防止策と他園館での対応を一部報告する。

塚田 仁次 (海の中道海洋生態科学館)

2回目の発表要旨

「博物館」で、リラックス効果がある? — 心理・生理測定法の開発 —

1. Withコロナ時代、そしてその後の博物館とは?

2020年、世界的な新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大のため、世界の9万5千ほどの博物館のうち、約90%が休館し、13%が永久に閉館する恐れがあるという。

出典: UNESCO「COVID-19: UNESCO and ICOM concerned about the situation faced by the world's museums」、2020.5.18発表

私たちは「地域博物館が地域社会でどんな役割を果たせるのか?」という命題を考える時間を与えられていると言っている。

2. 文化審議会「文化芸術推進基本計画 (第1期) について (答申)」(2018年) を読む

「博物館、美術館、図書館等は、文化芸術の保存、継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、(中略) また、教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」と提言している。

3. 「処方箋に症状に合った薬を書く」のではなく、「博物館と書く」

カナダの医師会は2018年から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、モントリオール美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めている。

出典: 「Can Going to a Museum Help Your Heart Condition? In a New Trial, Doctors Are Prescribing Art.」<https://observer.com/2018/11/doctors-prescribe-art-montreal-heart-condition-asthma-cancer/>, 20181116

4. 「2025年問題」、そして「2042年問題」。日本の医療費は膨れ上がる

「2025年問題」: 1947年から1949年に生まれた、いわゆる「団塊世代」が75歳以上の後期高齢者になる。
「2042年問題」: 高齢者数がピークとなり、高齢化率は36%。1971年から1974年までに生まれた「団塊ジュニア世代」がすべて65歳以上の高齢者となる。

人口1人あたりの国民医療費は33万9,900円 (2017年度厚生労働省統計)

10年前が26万7,200円、20年前が22万9,200円、30年前が14万7,800円と比べ、年々膨らむ。

5. 平均寿命、健康寿命の差を縮める

平均寿命は男性が81.41歳、女性が87.45歳。

健康寿命は男性が72.7歳、女性が75.4歳。平均寿命より男性が約9年、女性が約12年短い。

高齢者の健康の秘訣は何か? それは3つある。

①「体操・運動」 ②「食事、栄養」 ③「社会参加」

6. 博物館がフレイル予防の場になれるか?

高齢者は概ね、健康な高齢者、虚弱な高齢者、要介護な高齢者を経て、天寿を全うしていく。

現在、健康と要介護との中間の時期に位置する虚弱な高齢者は、筋力や心身の活力が低下する段階という意味から「フレイル」と呼ばれる。

カナダのような「処方箋に博物館と書ける」という取り組みは、その効果が客観的なエビデンスから裏付けられたことで、地元医師会と美術館の連携が可能になった。

7. 文化芸術が健康に効果的というエビデンスを見つける

世界保健機関 (WHO) 欧州地域事務局は2019年11月、「What is the evidence on the role of the arts in improving health and well-being? (健康と幸福の増進における芸術の役割に関するエビデンスとは?)」という報告書をまとめた。

過去20年に公表された英語、ロシア語の3000件を超える芸術関連の医学文献を検証。ヨーロッパを中心に芸術が健康に及ぼす効果はある一定認識されてきたが、それらの根拠となるエビデンスの存在は必ずしも十分に認識されてこなかった。

8. 文化芸術と健康に関する海外論文を読む

イタリアのボローニャ大学の研究グループは、ピエモンテ州にあるヴィコフォルテ大聖堂 (1500年代のもので、世界最大級の楕円形天井を持ち、天井や壁に「聖母子像」などのフレスコ画がある) で、生理面の実験を行った。約2時間のツアーで、大聖堂に入る前と出てきた時の2回、参加者の唾液を採取。ストレスホルモンの指標になる、副腎皮質ホルモン「コルチゾール」の値を検出すると、最大で60%のコルチゾール値の低下が認められ、参加者の90%が大聖堂に入る前より出てきた時のほうが良い気分になったと報告した (2016年)。

「Why art is good for your heart: People who admire Renaissance paintings 'see stress hormone levels drop by 60 per cent」Mail Online.2016

英国のウェストミンスター大学のAngela Clow氏は、ロンドンの労働者を対象に、昼休みにアートギャラリーを短時間訪問の前後で、コルチゾール検査を行った。訪問時はかなり高い値を示していたが、見学後の数値は正常値に戻っていた。美術作品を昼休みの短時間に見るだけでも、ストレスの軽減になると報告した (2006年)。

参考文献: 「Normalisation of salivary cortisol levels and self-report stress by a brief lunchtime visit to an art gallery by London City workers」Journal of Holistic Healthcare, 2006

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

9. 博物館と医療・福祉機関との連携の条件は？

2020年2月、「九州産業大学国際シンポジウム」で来日した、英国、ロンドンにある
ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー（1811年設立の世界初の公立博物館）のジェーン・
フィンドレーさんに「博物館、医療、福祉機関の連携のためのポイント何か？」と尋ねた。

「1つ目は、さまざまな異なる機関同士が会話する場を設けること。そして2つ目は、異なる機関同士が情報発信する中で、いかにして共通項を見いだせるか」と答えた。

10. さまざまな異なる機関同士が会話する場を設ける

九州産業大学は、博物館関係者と医療・福祉従事者が交流する、アニマル・セラピー、音楽療法、園芸療法、回想法の研修会を開催する。

参加した医師から、「『作品を見て、何となく気持ちがいい』という主観的な評価でなく、それを証明する客観的な評価、エビデンスが必要である」という意見が出る。まさに、エビデンスという「共通項」が両者の連携を進めることがわかる。

11. 「自然セラピー」に効果評価測定法を学ぶ

森林浴の生理的効果に関する実験は、1990年に始まったと言われる。その後、一時空白期間があったが2000年に入り、脳活動や自律神経活動計測法の進歩や計測機器の開発で、急速に進み、現在に至っている。

出典：宮崎良文「Shinrin-Yoku(森林浴)心と体を癒す自然セラピー」、創元社、2018

自然セラピーの概念について、宮崎氏は以下のように説明している。

- ① ストレスを感じる → ② 森林や花などによる鎮静効果 →
③ 生理的リラックス、免疫機能の改善 → ④ 病気の予防 → ⑤ 医療費の削減

基本的な実験方法は、概ね10名～12名が1単位となり、それを6名・4名ずつの2グループに分け、森林部と都市部での歩行、座観を1セットにし、2日間で交互に行っている。座観・歩行前後には、主観評価として、POMS2日本版(気分プロフィール検査)や「快適感、鎮静感、自然感」に関する13段階のスケール検査(空間印象評価=SD法)、そして生理評価として、血圧、脈拍、アミラーゼまたはコルチゾール検査などを行う。

12. 博物館でリラックス効果を測定する方法は？

具体的には、参加する医師、看護師、ケアマネージャー、そして学芸員、大学生などが、動物をさわる前後、音楽を演奏する前後、庭園を散歩する前後、そして作品を鑑賞する前後に、心理測定(POMS2日本版・SD法、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍、唾液アミラーゼ)を行い、リラックス効果評価を判定する。

こうした実験は、九州産業大学倫理委員会から承認を受ける。

13. 博物館で、リラックス効果はあったのか？

*実験のねらい

九州産業大学美術館で開催されている、第29回所蔵品展「絵画と語らう-風景・動物・人をめぐる旅-」の作品を鑑賞・即興演奏前後でのリラックス効果変化を検証することを目的とする。

*実験対象者

対象者は健康な20代から70代の男女14名であった。全ての対象者には、実験前に実験に関する詳しい説明を行い、被験者としての参加に同意を受けた。10月10日(土)実施。

*実験の方法

対象者は計4回の生理的・心理的評価をした。

1回目：実験開始前(11:20) 2回目：1人で鑑賞後(13:10)

3回目：グループで鑑賞後(14:10) 4回目：グループ演奏後(16:10)

*心理測定(VASシート)の結果

・視覚的評価スケール：VAS(Visual Analog Scale/ビジュアル・アナログ・スケール)の説明

例えば、「今、身体の調子はどうですか?」という質問に対して、「0」を「最悪な感覚」、「100」を「最良の感覚」として、現在の感覚を10cmの直線上のどの位置にあるかを示す方法。質問は全部で7問。診療の場で最も多く使われている。すべての項目で、「最良の感覚」へ有意に上昇していた。(p<0.05)

| | | | | |
|--|----------------|------|------|------|
| 例えば、「今、不安感を感じていますか?」については、「全く不安を感じていない」という方向に、距離を伸ばしている。 | 今、不安感を感じていますか? | | | |
| | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 4回目 |
| | 平均 | 4.90 | 5.79 | 6.18 |

| | | | | |
|---|----------------|------|------|------|
| 例えば、「今、爽快感を感じていますか?」については、「とても爽快である」という方向に、距離を伸ばしている。 | 今、爽快感を感じていますか? | | | |
| | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 4回目 |
| | 平均 | 3.84 | 5.07 | 5.12 |

*生理測定の結果

・使用機材の説明：(株)ニプロ製/唾液アミラーゼモニター、唾液アミラーゼモニター用チップ

交感神経活動の指標である唾液アミラーゼをストレスマーカーとする。

ストレスを受けると、神経系の視床下部を介して交感神経系の興奮を促す。

この興奮は体外のストレスに対する体内の自己防衛反応としてアミラーゼ活性を高める。

こうしたストレスに対する身体反応を非侵襲的な方法となる、唾液アミラーゼ中のアミラーゼ活性値を測定することで、ストレスの度合いを評価できる。数値が高ければストレスが高い。低ければストレスが低いと評価する。

| | | | | |
|--|---------|-----|-----|-----|
| 参加者は、チップを自分の舌下に30秒ほど差し込んだ後、唾液アミラーゼモニターで測定する。 | 唾液アミラーゼ | | | |
| | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 4回目 |
| | 平均 | 35 | 26 | 37 |

唾液アミラーゼは、以下の通りであった。

1回目から2回目で、数値は下がっている。1人でゆっくりリラックスして鑑賞したため、ストレスが下がったと考えられる。2回目から3回目で、数値は上がっている。グループでの話し合いに慣れていない受講生の緊張度が上がったと考えられる。3回目から4回目で、数値は下がっている。全体演奏が終わり、緊張が緩み、リラックスしたと考えられる。なお、これらの数値には有意差はなかった。今後、データの蓄積が必要である。

14. 「Museums Change Lives」を問い続ける

英国の博物館に行くと、入口に「Museums Change Lives」という看板を見ることがある。英国では、患者のHealth(健康)やWell-being(幸福感)の向上などを目的に、医学的処方に加えて、治療の一環をして患者を地域の活動やサービスなどにつなげる社会的処方と呼ばれる取り組みが進んでいる。

2015年のユネスコの博物館勧告には、「ミュージアムは社会全体に語りかけるゆえに社会的つながりと団結を築き、市民意識の形成また集団的アイデンティティを考える上で、重要な役割を持つ重要な公共空間である」と書かれている。

我が国には、5700館以上の博物館がある。

これからの博物館が、地域の医療・福祉機関と連携し、そして博物館の仲間と団結し、共通項を見出しながら、「博物館健康ステーション」という、新たな価値創造を紡ぎだし、「Museums Change Lives」を問い続けながら、前進していきたい。

そして、博物館浴(Museum Bathing)と名付ける「博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動」を展開し、その研究が進展していくことに尽力したい。

緒方 泉(九州産業大学地域共創学部/大学美術館)

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

2回目の発表要旨

世界的パンデミック下で高齢者層に働きかける - ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの取り組み -

新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)パンデミックは、我々の生活のあらゆる場面に尋常ならざる深刻な影響を与えている。英国では、これまでCOVID-19によって、健康、経済、社会が著しい影響を受けてきた。最近の研究で特に指摘されているのは、精神的健康の悪化、社会的孤立の深まり、食糧入手手段の欠如、失業の拡大、それに高齢者、障がい者、少数民族、貧困地域住民などの弱者への大きく偏った影響といった問題である。

この資料の作成時、英国ではウイルスの新しい変異株を受けて、国民保健サービス(NHS)のために入院者数を減らそうと3度目の全国的なロックダウンを実施しつつ、全国でワクチン接種の取り組みを進めて、感染を減らし、命を守ろうとしている。

芸術活動について言えば、国立機関から非常に小さなコミュニティレベルの団体に至るまで、その規模の如何にかかわらず、数々の組織がCOVID-19に不意を打たれたかたちだ。芸術部門は危機的状況にあり、多くの組織がこの前例のない事態を乗り切ろうと努める一方、スタッフ・利用者・ボランティアのことを気にかけている。2020年7月に英国政府は、芸術・文化・文化遺産産業を支えるため、15億7000万ポンドの緊急財政支援総合対策を発表した。これは一部の団体にとっては遅きに失したものとなったが、イングランド芸術評議会を通じて分配された助成金は、多くの芸術団体が事態に対処し、落ち着きを取り戻し、再出発するのに欠くことのできない命綱となっている。

博物館や美術館にとっても状況は同様に危機的だ。芸術基金“Art Fund”の緊急助成金を新たに受け取ることになった団体を発表するに当たって、基金のディレクター、ジェニー・ウォルドマンは、英国の博物館の60%が存続に不安を抱いており、なかでも小規模施設が最も危機に晒されていることが最近の研究によって明らかになったと述べている。ウォルドマンはさらにこうも述べている。「国民の皆さんには基金の『力を合わせよう、博物館のために(Together for Museums)』キャンペーンを支援し、できれば寄付をしていただきたい。そうすることで、これらのなくてはならないインスピレーションと沈思と喜びの場が、この危機を越えて私たちのために存在できるよう、基金としてできる限りを尽くすのに力を貸してください」

高齢者はCOVID-19の影響を非常に大きく受けている。特に70歳を超えていて基礎疾患のある人たちは、このウイルスに対して極めて脆弱である。英国では多くの人たちに身を守るよう推奨している。これはソーシャルディスタンスを保つことにとどまらない。可能な限り家にいて、外出は通院や運動に限ることを意味する。こうした状況が長引き、孤立状態が続くことで、深刻な影響が生じている。

私の発表では、精神的・身体的健康、孤独、大切な人との死別、自己放任(セルフネグレクト)、自信喪失など、英国の高齢者への影響を特に取り上げる。今回のパンデミックによって従来からの問題が際立つことになったが、取り組むべき新たな問題も提起された。どうすれば博物館は、今、そしてこの危機をくぐり抜けたときに、高齢者が引き続き社会の構成員として自信と活力を持てるようサポートできるのかを、我々は自問している。英国統計局(ONS)による調査では、70歳を超える人たちの5人に2人(39%)が、「パンデミックが原因で外出時に不安を感じる、あるいは非常に不安を感じる」ことが明らかになっており、こうした取り組みがまさに差し迫って重要であることが分かる。

次いで、芸術団体による高齢者支援への対応について詳らかにしたい。いずれの芸術団体にも独自の課題、環境、優先事項があり、それらがその団体の活動を特徴付けている。ベアリング財団(Baring Foundation)の報告書にまとめられているように、芸術団体の対応は、その多くが一から取り組んだにもかかわらず、迅速で機略に富んでいた。報告ではまた、デジタル格差にまつわる諸問題を芸術家たちが理解していることから、活動の様々な実施モデルが取り上げられている。Zoom上で集まりが催され、創作活動の材料一式が郵送され、電話回線も新設されて、高齢者が創造的に社会とつながりを持つことに役立っている。デービッド・カトラーが言うように、「ロックダウン下においてクリエイティブ・エイジング(creative

ageing)の活動はなくてはならないものであり、芸術家はその重要な担い手となっている」。

ここダリッチ・ピクチャー・ギャラリーには、地域コミュニティの高齢者と長きにわたって関わり合ってきた実績があり、健康的な年齢の重ね方については、創造性が前向きな影響を与えるとのエビデンスを多く蓄積している。加えて、来館者の傾向には大幅な高齢化が見られる。COVID-19パンデミックによって、今回こうした層に働きかける様々な方法に目を向ける必要に迫られてきた。我々はCOVID-19によってあらわになった健康格差を認識している医療サービスとの協働を進めており、そのあり方について触れようと思う。また、緑地の重要性と当ギャラリーの庭が担うようになった新たな意義についても取り上げたい。最後に、我々が試みてきた様々なプログラムや、つながりを維持するためのコミュニケーション手段、そしてオンラインアクセスの利点と課題についても概観したい。

ジェーン・フィンドレー (ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー)

経歴

過去11年間にわたり大英博物館、国立海洋博物館、ケンウッド・ハウス、ロンドン交通博物館などの英国の博物館で、さまざまな規模や内容のラーニング/エンゲージメントに携わってきた。とくにデジタル技術を活用した観客層の拡大に力を入れながら、あらゆる観客層を対象としたラーニングプログラムやプロジェクトを手がけてきた。現在はダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのヘッド・オブ・ラーニングを務め、コミュニティの高齢化を、美術館が芸術への積極的な参加を促すことによってサポートする新しい仕組みを探っている。また、海外との新たなパートナーシップの構築や、ラーニング分野での交流にも関心がある。

2回目の発表要旨

withコロナ、after コロナに向けた高齢者プログラムの取り組みと課題

1. アーツ・アンド・マインズの実績

アーツ・アンド・マインズは認知症の人たちとその介護パートナーを対象に、博物館を拠点とするプログラムを作成・提供している。私たちのプログラムは、孤立の防止と介護者のバーンアウトの軽減を意図したもので、創造的でワクワクするような活動の共有を通じて、幸福感を増進させることが認められている。私たちは認知症を社会正義の問題であると考えており、私たちのアプローチでは人間としての尊厳を支え、高齢者差別に抗し、認知症に対してもっと優しい社会になるよう貢献する。アーツ・アンド・マインズが重視しているのは、認知症率が突出して高い黒人やヒスパニック(ラテンアメリカ系)のコミュニティであり、対応の進んでいないコミュニティでの取り組みに尽力している。

2. COVID-19を契機として

2020年3月、COVID-19パンデミックの発生を契機として、アーツ・アンド・マインズはプログラムのプラットフォームをただちに変更した。感染リスクと博物館閉鎖のため、参加者が直接参集することは不可能になった。ニューヨーク市のロックダウンに先んじて、3月中旬、アーツ・アンド・マインズは全く新たなバーチャルの取り組みを開始した。現在のArts & Minds @home|Arts & Minds en casa(『おうちでアーツ・アンド・マインズ』)である。この1年間、参加者たちはビデオカンファレンスを通じて、自宅に居ながらにして私たちのプログラムを楽しむことができた。またオンラインでのプログラム提供に軸足を移したことが、オンライン研修講座開発のきっかけにもなった。この講座は博物館が、コミュニティ内の認知症の人たちに活動を広げるのに役立つだろう。

3. オンラインでの参加

パンデミック発生当初、参加者の多くはすぐさまオンライン形式に切り替えたが、なかには博物館が再開すればまた参加しようと考えて、そうしなかった人たちもいた。私たちは現行プログラムの総利用者数を増やすことを念頭に、ターゲットオーディエンスである黒人やラテンアメリカ系の認知症の人たちへの働きかけを、特に一新することに取り組んでいるところだ。一般向けのプログラムを提供するほか、アーツ・アンド・

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

マインズはコミュニティに根差した社会福祉団体、メデジン(コロンビア)の研究グループ、アストン大学(英国)とも連携を保っている。

オンラインプログラムによって、認知症の人たちと介護パートナーをその生活の場において取り込む可能性が開け、参加者の多くがこうした非常時でなくても直面する課題、すなわち身体障がい、公共交通機関へのアクセス、行動障がいなど、外出時の地理的障壁・課題が解消された。デスクトップやラップトップパソコン、タブレット、スマートフォンを使って、オンラインでの参加が可能となった人たちの数は嬉しい驚きだった。とは言うものの、私たちはデジタル格差という現実を認識しており、地方自治体や諸団体がこの問題を解決すべく取り組んでいることから、私たちは最新の事情に通じるようにしている。ちなみに、ラップトップやタブレットといった形でのデジタルアクセスは大抵の場合、介護士によって提供されていることが分かっている。こうした経験からも明らかなように、今回のパンデミックが収束して再び博物館をグループで安全に訪れることが可能になっても、オンラインでの取り組みを求める声は残るだろう。したがって、自宅で参加できるバーチャルプログラムは、アーツ・アンド・マインズの活動ポートフォリオの一部として、恒久的なものになると予測される。

4. 電話や郵便でのコンタクト

以前からの参加者のなかには、オンラインプログラムへの参加に気乗りしないと認める人たちもいた。技術的要素がその理由だ。これはアクセスに起因することもあるが、好みの問題であることが多い。そうした参加者と同じく、私たちもCOVID-19の危機は一時的なもので、何ヶ月もしないうちに博物館の現場に戻るようになるだろうと考えていた。

そうした人々のなかには、この夏の間、私たちから画材の入ったささやかな小包を受け取った人たちがいた。その後、私たちはアートカードのセットを送ったが、そこには絵のほかには背景説明や会話を引き出す質問、創作活動のヒントを添えた。現在、認知症患者や介護者のニーズに沿ってこれからプログラムをどう展開するか方向性を得るための評価を行っているが、このプログラム評価では技術に関する諸問題も正面から取り扱われるだろう。

5. 組織としての課題

プログラムを進めるに当たっては、あらたに技術関連経費が発生する。オンラインプログラム作成に要する時間やエデュケーター技術講習は、経費を大幅に押し上げている。各プログラムに必要なティーチングアーティスト料に加えて、今や技術的なサポートを行うための「ホスト」を務める別のティーチングアーティストへの支払いも生じている。

オンラインプログラム作成は労働集約度が高い。それでも、私たちは2020年に150近くのプログラムを英語とスペイン語で提供し、(認知症の進んだ人々を参加対象とした)アートと五感(Art & the Senses)、介護者のためのセルフケア(Self-Care for the Caregiver)、アーティストのアトリエ訪問(Artist Studio Visit)、リズムと理性(Rhythm & Reason)(音楽と科学)といった新形式のプログラムも導入した。一般向けを予定しているもの、依頼によるものを問わず、オンラインでのグループプログラムは、いずれも提携博物館の収蔵品を題材にしており、その博物館の収蔵品について具体的知識を備えたアーツ・アンド・マインズのエデュケーターが担当している。

また、アーツ・アンド・マインズのフェイスブックページやフェイスブックグループのためのコンテンツも開発しており、一日のうちプログラムが実施されていない数時間に、好きなペースでできる活動を提供している。さらに、WhatsAppを通じてスペイン語を母語とする介護者とメッセージをやりとりしている。このようにコミュニケーションを厚くするためには、アーツ・アンド・マインズのプログラムコーディネーターにかなりの時間を費やしてもらう必要がある。

6. 全米でのArts & Minds @home 今後も引き継がれるオンライン事業:新たな取り組み

オンラインプログラムは楽しみをもたらす活動への高齢者層のニーズを満たすという課題への解決策となっている。このアプローチは、現在構築中の専門職養成のための研修プラットフォームと相まって、これ

まではできなかったプログラムの質と持続性を両立する機会を、ついにアーツ・アンド・マインズにもたらしてくれた。才能に恵まれ、共感力のある、多様性豊かなエデュケーターやティーチングアーティストからなる活動従事者に十分な研修を行っておくことが、この解決策の重要な要素である。

7. 充足されていないニーズと取り組みの広がりの可能性

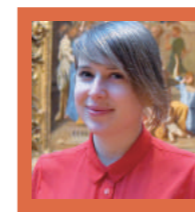
認知症と診断されているアメリカ国民は570万人と推定され、その数は2050年には3倍になると予測されている。そのような状況のなか、国内博物館のプログラムはあまりにも少なく、芸術、歴史、庭園など、審美的興味の対象との交感があると考えられるすべての人たちに行き届いているとは言えず、私たちのユニークなアプローチを採用している博物館となると、その数はさらに少ない。認知症の人たちは診断後3年から長い場合は20年生きるとされている。その間、多くの患者にとって、同様の困難を抱える人たちと一緒に美的経験や創造力を通じて高めた生活の質を享受することが可能である。アーツ・アンド・マインズのユニークなアプローチでは、成人教育とパーソン・センタード・ケア(person-centered care)の原理を研修プログラムにも博物館プログラムにも適用しており、認知症と共に人生を歩んでいくことを感情面で支援するコミュニティ作りを目指している。

キャロリン ハルビン-ヒーリー (アーツ・アンド・マインズ(Arts & Minds))

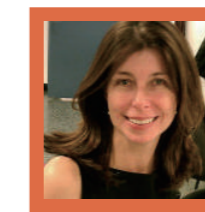
経歴

神経科学者のジェームズ・M・ノーブル医学博士と共に、芸術を通して認知症患者とその介護者の生活の質の向上を目指す非営利団体アーツ・アンド・マインズを2010年に設立。メトロポリタン美術館の博物館教育で25年以上の経験を持ち、認知症患者とその介護者のための美術館のプログラム制作に携わっている。国内外で数多くの講演会やトレーニングワークショップを実施している。

11-6



ジェーン・フィンドレー
ダリッシュ・ピクチャー・ギャラリー
ヘッド・オブ・プログラム・アンド・
エンゲージメント



キャロリン
ハルビン-ヒーリー
Arts & Minds
エグゼクティブ・ディレクター



鬼本 佳代子
福岡市美術館
学芸課 主任学芸主事
(教育普及専門)



御前 明洋
北九州市立自然史・歴史博物館
自然史課 地層担当学芸員
(自然史担当係長)



塚田 仁次
海の中道海洋生態科学館
運営本部 展示部 海洋動物課係長



緒方 泉
九州産業大学美術館長
九州産業大学地域共創学部教授

米国・英国博物館関係者を招聘した 国際シンポジウム事業

* 1回目事後アンケート *

以下の1~4について、感想(気づきや発見、気になったキーワードなど)をお聞かせください。

① 日本、福岡市美術館 鬼本 佳代子氏の事例報告

● 様々な活動を縮小せざるを得ない中で、「オンライン大作戦」として美術館の裏方の紹介をはじめ、新たなプログラムが模索されているとのことで、大変印象的でした。オンライン活動により、日頃来館が難しかった方も美術に触れる機会ができるようになったとのお話があり、日々より良いオンライン教育プログラムが研究されていると感じました。そういった活動が今後も続けられ、幅広い年代の子ども達を対象にしたオンラインギャラリートーク等が実現されるようになって良いと感じました。

● オンライン活用の可能性について、「遠方の人や障害のある人や遠方の人に参加できることがある。」とおっしゃっていたのを聞いて、オンラインでしかできないことをコロナウイルスは教えてくれたのだと改めて実感しました。実際にこのシンポジウムも自分は熊本の自宅から参加しているので、オンラインについて考え直すいい機会になったと感じました。

② 日本、北九州市立自然史・歴史博物館 御前 明洋氏の事例報告

● 北九州市立自然史・歴史博物館におけるコロナ対策は、具体的な基準を決めた上での対応が大変印象的でした。医師のアドバイスを受けながら、制限を徐々に緩和していることが伺え、可能な限り活動を充実させているという印象を受けました。ご報告を通し、ウィズコロナ時代の博物館のあり方を考えることができました。

● 展示レイアウトを作成する際に、2メートルのソーシャルディスタンスを図面に落とし込む作業を入れる。その配慮が鑑賞者にとって安心感につながる材料になるなと思いました。

③ 日本、海の中道海洋生態科学館 塚田 仁次氏の事例報告

● 入館前のサーモグラフィーの導入や座席を減らすなど

の取り組みの紹介にとどまらず、他の水族館の取り組みも説明して下さったところも、とても参考になりました。

● 職員、来館者いずれも感染対策が徹底されており、水族館ならではのデザイン性のある案内表示等が、印象的でした。一方で、感染対策としてボランティアや実習生の受け入れ中止、レクチャールームの閉鎖があり、止むを得ないことと思いますが、やはり心苦しく感じる部分もありました。コロナ禍の対策を含め、水族館の取組を多くの人が知る機会があると良いと感じました。

● 各博物館のイメージキャラクターを使った三密対策について聞いて、ぜひ自分もこれを真似してみたいと思いました。自分は学校の文化祭で生物室の運営を行うので来年度の設定時にこのアイデアを取り入れたいと思います。

④ 英国、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー ジェーン・フィンドレー氏の事例報告

● コロナ禍での大変深刻な状況が伝わってきました。ボランティアの再開にも重視しており、ミュージアムやアートが社会にどのような貢献ができるのかという点を模索されていたのが印象的でした。また、アートが健康や幸福のためにいかに大切かという点にも言及されており、日本ではなかなか出来ていない取り組みなので、とても興味深く感じました。

● オンラインでの美術鑑賞やSNSの活用等、美術館活動を継続し、さらに充実させていく取組がたくさん見られ、印象に残っています。Instagramで人々が情報を発信しシェアしている事例がありましたが、このことから美術館が生み出すコミュニケーションは多様にあると感じました。困難な中でも新しい取組が次々と模索されており、興味深く、大変印象的でした。

● イギリスの状況を捉えながら話を伺うと、博物館の運営状況がこれから益々危なくなってくるというのはとても他人事ではないと危機感を覚えました。また、医療従事者などに対して博物館がサービスや労いができないかという点から、虹のデザインを作って発表していくのはとても良い取り組みだと思いました。

● 日本の博物館と比べて特に社会性という観点で博物館は大きな役割を果たしているのだとわかりました。報告の中で何度も「コミュニティ」という言葉が何度も出てきているのを聞いて、博物館は地域のコミュニティのハブ的な役割を果たすことができると知って高齢化が進む日本でもこのような動きがあるといいなと感じました。

⑤ 米国、Arts & Minds

キャロリン ハルビン・ヒーリー氏の事例報告

● 世界中がコロナ禍で大きな打撃を受けた中、アメリカでは教育面での影響に言及されていたことが印象的でした。私が活動しているボランティアでも、今までのやり方が通用しなくなっているため、新しい方向性へと舵を切ることの重要性を模索しています。それに伴って柔軟性を持つことと包摂的にならないことを、お話を通して考えました。また、コミュニケーションの大切さを改めて認識し、オンラインでもオフラインであっても出来ることを実践していきたいと思います。

● 大きく考えて小さく始める、普通のことからひらめきが生まれるという言葉がとても印象に残った。

● アメリカの博物館でもコミュニティの中心に博物館がなるという言葉が何度も出てきて、人々の学びだけではなく、癒やしとしてアートのコミュニティがあるのだと知ることができた。

⑥ シンポジウムの質疑応答

● 国内外の各館での感染対策やオンラインコンテンツ等の新しい活動を共有することは非常に重要な機会だと感じました。他館の対策を参考にし、今後の方針を検討していくことで、感染対策を徹底したうえでの最大限の活動を継続していけるのではないかと思います。多くの博物館や美術館が来館者と直接顔を合わせる事が容易には叶わない今日ですが、そのような対面での活動を、限られた範囲でも大切にしていけることが望ましいのではないかと思います。オンライン活動と並行しながらも美術館・博物館体験を充実させていくことが求められるのではないかと感じました。シンポジウムを通し、人と人の繋がりをつくるといふ博物館・美術館の使命や地域における役割が明らかになりました。

● いずれの館の話も伺っていて、オンライン環境を整えて館内・館外での対応が増えたことSNSを使った交流が圧倒的に増えたことから、使い慣れているかどうかで良くも悪くも差が開いていくと思いました。また、コロナで不安が増えていく中で、ジェンダー、マイノリティ問題が表出してより一層、社会正義や連帯が求められる場面が増えたのかなと思いました。

* 2回目事後アンケート *

以下の1~4について、感想(気づきや発見、気になったキーワードなど)をお聞かせください。

① 日本、九州産業大学 緒方 泉氏の事例報告

● 文化審議会「文化芸術推進基本計画(第1期)について(答申)」にて、博物館が福祉機関・医療機関の関係団体との連携が求められているとの提言を受け、博物館が提供する文化芸術がフレイル予防の場になれるか、またどのように機関同士が連携したら良いかとの問題に対して、共通項、共通言語を探す重要性を学ぶことができました。また、文化芸術が健康に効果的というエビデンスや海外の先行研究、また森林浴のもとらす「自然セラピー」の研究を応用し、心理・生理測定法を利用した「博物館浴」が人々にもたらす研究結果はとても興味深かったです。やはり、エビデンスの存在はとても重要だと再確認しました。コロナ禍において、高齢者の筋力や意欲低下の問題を目の当たりにして、深刻さを痛感しています。緒方先生の研究を通して、日本でも処方箋に「博物館」と書けるような取り組みが始まることを期待しています。私自身福祉職としても、現場で応用できる様々な可能性を探りたいです。そのためには、もっと博物館に関心をもつ人々が増えるように、小さなことでも活動を続けていきたいと思っています。

● コロナ禍の中で、エビデンスを出すための調査が進んでいて良かったと思いました。認知症がある場合、その方の状態によりますが、少しの環境の変化によって心理状態が変わってきますので前後を因ることが非常に難しく感じます。今回のご報告のように一般の方の測定だと効果がはっきり表われるのだと思いました。「博物館浴」「博物館健康ステーション」をキーワードに様々な機関との連携に加わることができればと改めて思いました。

● 文化芸術が健康に効果的というエビデンスを多様なミュージアムでの実験を通して探っておられるところが大変興味深かったです。明確な根拠が得られれば、国内初?の成果が得られるということになるのではないのでしょうか。「博物館浴」という言葉も素敵だと思いました。

● 高齢者の健康と福祉の観点から、高齢者医療に携わる関係者、家族、介護者を巻き込んだ「博物館浴」を進めていくことの気概を感じました。コロナによる隔絶や、イン

米国・英国博物館関係者を招聘した 国際シンポジウム事業

ターネット環境の有無からくる隔絶もありながら地域社会における博物館は何ができるかが問われると思われました。

② 英国、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー ジェーン・フィンドレー氏の事例報告

● ロンドンでは、日本以上に高齢者に対する状況は厳しいものと分かりました。包摂的なコミュニティのニーズを把握した、感覚に訴えかけるような「高齢者プログラム」のご紹介はとても興味深いものでした。また、博物館だけでなく博物館の外にある「緑地」の重要性を説いていらっしゃるの、緒方先生の発表と関連して考えるきっかけになりました。一昨年、関西でも博物館・美術館にある庭(緑地)を取り入れたワークショップが開催されていたことを思い出しました。コロナ禍において、オンラインでの取り組みは最も知りたいことのひとつでした。しかし、参加が難しい方のために、家で使えるようなものを提供し、クリエイティブな作品を再度共有出来るような「つながり」を大切にしたい取り組みは素晴らしいと思われました。もちろんオンラインでの取り組みは、私も参考にさせていただきたいと思えます。オンラインであってもそうでなくても、柔軟な取り組みが必要なのだと感じました。また、「アートがもたらす幸福感」というキーワードもとても素敵でした。コロナ禍であっても、私もジェーンさんと同じようにポジティブな視点を忘れずに、これまでとは違ったリソースの開発の必要性を探っていききたいと思います。

● これまでの高齢者向けのプログラムが通常通りできないことから、地域にあるものを使いながら博物館単体ではなく、屋外にある緑地や地域の人を巻き込んで交流事業を組み込んでいきたいという攻めの姿勢を感じました。さらに、健康格差がBAME、マイノリティに顕在していることがより憂慮されていることが窺えました。

③ 米国、Arts & Minds キャロリン ハルビン-ヒーリー氏の事例報告

● まず感動したのは、トム・キッドウッドの提唱した認知症の方の「パーソン・センタード・ケア」五つの花びら(心理的ニーズ)の中心にある「愛」を「Art」と力強く話されたことです。私たち認知症の方のケアに関わっている者にとってパーソン・センタード・ケアの理念は基本であり、この理念は他の方々への支援にも通じると考えています。博物館がこの理念をもって高齢者の方へのプロ

グラムを実施していることを大変嬉しく思いました。認知症の人が暮らしやすい地域は、全ての方が暮らしやすい地域であると思っています。その視点でキャロリンさん方の取り組みには共感できるものが多々ありました。コロナ禍のなか、いち早くアーツ・アンド・マインズを自宅に移しオンラインに切り替えることができたこと、200ものプログラムを持っていること、どうしてできるのか具体的に詳細を知りたいと思えました。そしてキャロリンさんが強調されていた、「関与するプロが必要」だと言うこと。認知症と博物館のリソースを結び、高い生活の質を考えていくには関与する人たちのスキルが高くあること。ファシリテーター、トレーナーの研修が必須、学ぶことが必要など、いつも考えていたことなので頷けました。大変関心のある報告でした。

● アーツ・アンド・マインズの取り組みを拝聴し、コロナ禍でたくさんの制限がある中でも、オンラインによってこれだけの成果が引き出せたことにとっても驚きました。たくさんの機関が連携していることへの裏付けにもなっています。日本では、各機関での連携の必要性を認識してはいるものの、実際には難しいのが現状です。いろいろな状況下においても、オンラインプログラムの取り組みによって、たくさんの人々が博物館へのアクセスを容易にすることが出来たということは素晴らしいことだと思います。同時にデジタルデバイドの問題に対して、電話や郵便を利用したコンタクトで得られたことも、とても参考になりました。オンラインを嫌がる人々の存在を軽視してはならないことだと、改めて認識しました。また、当事者のみならず家族や介護者もとても疲弊しているのを伺い、オンライン上であっても温かい気持ちになりました。また高齢者プログラムの取り組みは、アメリカであってもまだまだ少ないとのことでしたが、いろいろな立場の人々への取り組みが博物館を通して行われるようになって欲しいと思っています。オンラインプログラムを進めるにあたって、様々な分野の活動従事者への研修は必須となりますが、印象に残ったことはパーソン・センタード・ケアの原理を研修プログラムにも博物館プログラムにも適用しているということです。改めて、まだまだ自分自身の価値観だけで行動している点があると、振り返ることが出来ました。そして、これこそが多様性を認めることにつながる実践だと思えました。

● コロナで不安が増えていく中で、ジェンダー、マイノリティ問題が表出してより一層、社会正義や連帯が求められる場面が増えたのかなと思えました。

● キャロリンさんのご報告では、博物館の他機関との連携が印象的でした。博物館が拠点となり、人と人をつなげ、多様な関わりを生み出しているように感じました。そして、そのような役割は、特に地域博物館に求められるものであると改めて思いました。また、認知症を持つ方の回復を目指すという具体的な方針のもとでの活動が印象的でした。プログラムをオンラインで実施するにあたり、運営者としてオンラインの訓練の必要性が高まっていることが分かりました。現段階では明確な方法が確立しておらず、模索しながらの対応で困難が多いのではないかと感じます。博物館同士での連携、情報共有がこれまで以上に欠かせないと思えました。一方、社会問題の解決に貢献するとともにさらなる楽しさを追求できる点に、博物館の可能性を感じました。博物館はこれからの生活で、より人々の生活に欠かせない場所となっていくのではないかと思います。問題解決と楽しみの提供の実現には、専門家等の人材の確保や政府等からの助成金が不可欠であると思えます。博物館に必要な支援が十分になされることが望まれると思えました。

④ シンポジウムの質疑応答

● これまで医療機関にいて、一博物館を活用させていただいていましたが、共通の言語で同じ目的を持つ方々がもっと増えないと広がっていくことができないと感じていました。なかなかまだ提案はできないかもしれませんが、皆さんのお話を伺いながら、高齢者の文化的に豊かな生活の質を高め、より良く生きるために役に立てると良いと思っています。

● いずれの館の話も伺っていて、オンライン環境を整えて館内・館外での対応が増えたことSNSを使った交流が圧倒的に増えたことから、使い慣れているかどうかで良くも悪くも差が開いていくと思えました。しかし、博物館が教育ないしはケアする役割から、高齢者を含め社会的弱者、マイノリティとされている人たちを取りこぼすことなく包摂性を持ってあたっていく重要性を感じました。短期的な具体策や目標値は数値設定しにくいかもしれませんが、博物館以外の分野の人にも協力してもらいながら出来なくはないのではとも思いました。

● まず、キャロリンさんのお話にあった、オンラインでのコミュニケーションは想像以上に容易にでき、スクリーンを通じた対話は可能であることが分かったとの

言葉が印象的でした。当然、対面と同様の対話が叶わない部分もありますが、オンラインが定着していくことで、オンラインであることを活かしたコミュニケーションが生まれることが期待できると思えました。人々とのコミュニケーションの時間をいかに作っていくかが大切であると感じました。また、事後の反省の重要性についてお話があったことも印象に残っています。このような新型コロナ禍では、経験したことのないことから得られる気づきがたくさんあると思えます。それらを見落とさず一つずつ検討していくことの重要性を感じました。一方で、参加者に付き添う介護者へのケアの重要性も知りませんでした。このことから、博物館には、すべての人を対象に、最適なサービスを提供していくことが求められていると感じました。さらに、特に印象に残ったのは、博物館体験は教育でもなく、自分自身のことを感じることであるという言葉です。この言葉からは家庭でもなく、学校あるいは職場でもない、第三の居場所として、人々がより快適で幸せな生活を送ることを叶えるのが博物館であると改めて感じられました。そのような場として機能していくために、博物館で可能な様々な体験を持つ効果の研究がより深められていくことが望まれると感じました。今回のシンポジウムでは前回に引き続き、博物館の持つ機能や提供できるサービスに関して、新たな発見を得ることができ大変勉強になりました。今回学んだことを今後活かしていきたいと思っております。2回にわたり、貴重なお話をお聞きする機会をいただき、誠にありがとうございました。

11-8